高島鞆之助*

三　﨑　一　明

1

高島鞆之助は，弘化元（1844）年 11 月 9 日，鹿児島藩士高島喜兵衛と貞子の第 4 子，3 男として鹿児島城下高麗町に生まれる．幼名を三七といい，その後昭光と称する．陸軍中将正二位勲一等菊花大綬章，子爵高島鞆之助は，大正 4（1915）年 10 月におこなわれた大正天皇の京都御所での即位礼に参加したのち，11 月胃をわずらい，大正 5（1916）年 1 月 11 日朝，脳溢血のため，満 73 歳で京都市伏見区深草町の養嗣子高島友武宅でなくなる[1]．高島終焉の地は，奇しくも若き日，高島が鳥羽伏見の役で戦った場所である．これが高島の誕生と死である．高島の誕生から死までについて詳細に述べたものは，わたしがしるかぎりにおいていまだにない．本稿において，いつどこで何をしていたのかという観点から，高島の前半生を中心にすこし詳しくみることにする．

高島の父，喜兵衛は藩のお蔵役を勤め[2]，母貞子は堀八郎右衛門長女であり，文化 9（1812）年 7 月に生まれ，明治 36（1903）年 10 月になくな

＊本稿を書くにあたって，追手門学院大学附属図書館相互利用係の方に，お世話になったことを感謝いたします．

1） 稲村編（1972）p. 82，日高（1931）p. 643，黒龍会編（1966）p. 296．また，日本史籍協会編（1978）p. 145 により，高島の誕生日を西暦になおすと，1844 年 12 月 18 日である．杉本編（1893）p. 224 では，高島は 4 男となっている．

2） 橋口（1932 A）p. 38.

る[3]．兄弟は，長男喜之助，長女たみ，2 男彦次郎，3 男鞆之助，4 男研次郎，5 男四郎助，次女とめ，男 5 人，女 2 人の 7 人兄弟である．長男喜之助は夭逝し，長女たみも早くになくなり，5 男四郎助は，明治 4（1871）年にコレラでなくなっている[4]．

高島の子供時代のエピソードである[5]．

「高島将軍厳父は篤実なる好人物で家政窮乏を来たし日々の糧さえ事欠き，一家は粥食で暮らした程貧であった．将軍は幼にして穎悟，文武に秀でた親孝行者，炊事の水汲みやら米搗きを終えて，毎日御殿に仕えた．或る時は刀のサゲを買うことにも不如意，令姉が夜業の賃で買求め与えたという逸話がある」．

これに対して橋口西彦はつぎのように書いている[6]．

「かって男の子供の刀の下緒を購う金なくて，夜子供の寝たる閑に，自から機を織り，糸を紬いでこれを製し，子供たちを喜ばせたこともあつたという」．

ここでは，母が自分で機を織り，作った話になっている．話を聞いた時期は異なるとしても，この話のみなもとは同じとおもわれる．橋口は，すくなくとも樺山，球磨子からこの話を聞いているのは間違いない[7]．どち

3） 霞会館華族家系大成編輯委員会編（1996）下，p. 14.
4） 橋口（1932 A）p. 40.
5） 樺山資英伝刊行会編（1942）p. 258.
6） 橋口（1932 A）p. 39.
7） 橋口は『樺山資英伝』の資料収集担当協力者のひとりである．山本實彦「樺山資英伝記刊行につき」p. 2，樺山資英伝刊行会編（1942）所収．また「高島を語る座談会」に橋口は参加していて，この話を樺山の家族から聞いているとおもわれる．樺山資英伝刊行会編（1942）p. 262.

らが正しいのかわからないけれど，高島は，はやくになくなった姉思いであったということは確かである[8]．

「長女たみは母と共に深更まで機を織り，糸を紬き，血の滲む奮闘を続けた．将軍また分けて姉思いであつた．晩年に至るまで亡姉在世の昔を追懐しては一掬の熱涙さへ浮かぶることがあつた」．

高島の妹（高島喜兵衛 2 女）登女子[9]は，嘉永 4（1851）年 12 月 23 日に生まれ，大正 8（1919）年 2 月 18 日になくなっている．彼女は鹿児島城下高麗町出身の野津道貫の妻である．野津の子供時分も家が貧しく，高島同様に粥食であった[10]．登女子の長男，野津鎮之助の妻は末弘直方（当時福岡県小倉市長）の 4 女ひろ子である．末弘直方は鹿児島平佐の出身で，西南戦争直前の明治 10（1877）年 1 月に警視庁から鹿児島に派遣され，鹿児島県庁に逮捕，拘禁された警官の一人である．のち柳原前光勅使一行に引き渡される．勅使護衛のために高島がこの一行のなかにいる[11]．また，ひろ子は日本最初の美人コンテストで 1 位になった女性であり，鎮之助とひろ子の縁を取り持つのが乃木希典である[12]．

つぎは高島の妻と子供たちである．高島の妻，春子は安政元（1854）年 5 月 1 日，鹿児島藩士山口喜三右衛門[13]の 5 女として生まれる．春子の弟

8） 橋口（1932 A）p. 40.「長女たみ」は，原文では「長女とめ」となっている．
9） 霞会館華族家系大成編輯委員会編（1996）下，p. 344，では，高島「嘉兵衛」二女「登女子」と記載されている．本稿では「喜兵衛」を採用する．高島「嘉兵衛」の名は，公爵島津家編纂所編（1968）中，p. 837 に，海軍掛員下目附のひとりとして記載されている．
10） 渡辺（1909），p. 108.
11） 参謀本部陸軍部編纂課編（1887）22, p. 3.
12） 『時事新報』明治 41 年 3 月 5 日．このとき，ひろ子は 16 歳で学習院に在学しており，このため学習院を退学する．学習院長は乃木希典である．
13） 霞会館華族家系大成編輯委員会編（1996）下，p. 14．橋口（1932 B）p. 42 では，父は山口喜平次である．

は山口栄之丞である[14]．春子は，高島の母貞子が亡くなった翌年，明治 37（1904）年 10 月，満 50 歳でなくなっている[15]．春子がなくなる前年に出版された『明治大臣の夫人』に「高島鞆之助夫人」[16]として紹介されている．それによると，花卉の栽培が趣味で，とくに朝顔は数多くの種類を栽培していたとのことである．さらには，高島ともども夫婦そろって花札を愛好したとある．

高島と春子が結婚したのはいつであろうか．明治 2（1869）年 5 月 18 日，榎本武揚が降伏し，戊辰戦争が終わる．高島はそれより前，明治元（1868）年 10 月には，庄内を出発している[17]．帰藩するのは同年 11 月 28 日である[18]．そして明治 2 年 1 月 3 日，鹿児島陸軍方から教佐に命ぜられる．同年 2 月の藩政改革により，鹿児島藩庁に軍務局がおかれる．軍務局は海軍方，陸軍方，兵器方，軍馬方で構成され，陸軍方には，大隊長，教頭，教佐，騎兵 1 隊長，砲兵 1 隊長，歩兵小隊長がおかれている．さらに半隊長，分隊長，子頭等がおかれる．これらが 11 等に分けられ，教佐は 4 等官である．4 等官の俸禄は，150 俵，120 俵，80 俵である[19]．大隊長には，桐野利秋，篠原国幹，川村純義，野津鎮雄，樺山資紀，種子田政明，田原明章がなっている[20]．

明治 2（1869）年 7 月 5 日に，軍功により章典禄 8 石を支給されている．これは生還した城下士の章典禄が 8 石と定められたことによる[21]．明治 3（1870）年 2 月，高島は教佐として 1, 2, 3 番大隊を督して上京する．

14） 杉本編（1893）p. 224.『先賢伝記集』では，栄之丞は兄とある．
15） 『先賢伝記集』p. 75．霞会館華族家系大成編輯委員会編（1996）下，p. 14.
16） 岩崎（1903），p. 43–48.
17） 『枢密院高等官履歴』第 3 巻，p. 163.
18） 日本史籍協会編（1972）p. 324.
19） 鹿児島県編（1967）3 巻，pp. 534–540．高島自身が書いている履歴（『枢密院高等官履歴』）と藩政改革の時期は異なる．
20） 鹿児島県編（1967）3 巻，p. 573
21） 同上，pp. 509–510.

この間鹿児島在住中に，高島は高岡郷のトマ騒動にかかわっている[22]．したがって，戊辰戦争から帰ってきた明治元年 12 月から明治 3 年 2 月，1 年と 2, 3 ヶ月の間，高島は教佐として鹿児島にいたことになる．

ところで 8 石とは，どのくらいのものであろうか計算してみる．1 食に 1 合の精米を食べ，1 日 3 食であると仮定する．1 日 3 合の精米は，1 年 365 日では，10.95 斗，すなわち，1.095 石になる．明治 44（1911）年から大正 4（1915）年の精米 1 人 1 年あたりの消費量は 131 kg である[23]．精米 1 合の重さを 140 g と仮定すれば，131 kg は 0.94 石である．明治時代に 3 食であったかどうかわからない．さらには先の話にあるように，純粋の米食ではなく，かゆ食であったり，米以外の雑穀類を食べていたりする可能性もある．成人が 1 年に食べる精米量を約 1 石とするのは，仮定の話であり，それに当てはまる時代もあったというだけである．ちなみに 2000 年の精米 1 人 1 年あたりの消費量は 0.46 石（64.6 kg）である[24]．1 人であれば，8 石のうち残り 7 石が生活費となる．また，教佐として高島の俸禄が，一番下の 80 俵と仮定すると，つぎのような計算となる．1 俵は 4 斗として，80 俵は 320 斗，すなわち 32 石である．もちろん 8 石，80 俵が籾高なのか，玄米高なのかでも計算は変わってくる．玄米を精米すると，1 割はぬかとなる．もみならば，さらに大幅に減少することになる．

結婚したとき，春子 16 歳である[25]．これが正しいとして，かぞえであ

22） 高岡郷の地頭，中山中左衛門がトマを奨励するために，トマの生産高に応じてトマ札を発行・配布し，これと交換で米，味噌を購入させた．その結果，トマを生産しないものは，米，味噌を購入できないため，本業がおろそかになり，生活が苦しくなった．このため反対運動が起こる．このとき軍務局から鎮圧に来たのが高島らである．説得してもいうことを聞かないのに腹を立て，「郷士は郷士の分を守れ，出過ぎたことを，すっとじゃなか」といってかえる．これがやがて実力行使を伴う騒動となり，首謀者たちは死罪を命じられる．これを桐野利秋が釈放させて，助命している．南日本新聞社編（1967）上 pp. 375–376.

23） 矢野恒太記念会編（2000）p. 215.

24） 矢野恒太記念会編（2005）p. 148.

25） 橋口（1932 B）p. 45.

れば春子 16 歳は明治 2（1869）年になる．このとき高島はかぞえで 26 歳である．2 人の結婚は，おそらく高島が教佐になったのち，春子がかぞえ 16 歳である間，明治 2 年の間であるとおもわれる．

高島の子供は 7 人である．長女多嘉は，明治 6（1873）年 6 月 16 日に生まれ，昭和 19（1944）年 9 月になくなっている．2 女志満子は明治 8（1875）年に生まれ，明治 11（1878）年 8 月になくなっている．長男鉄雄は明治 11 年に生まれ，明治 11 年 9 月になくなっている．2 男鞆吉は明治 13（1880）年に生まれ，明治 13 年 1 月になくなっている．3 女球磨子は，明治 14（1881）年 1 月 26 日に生まれ，昭和 22（1957）年 8 月になくなっている．4 女愛子は，明治 18（1885）年 2 月に生まれ，昭和 32（1957）年 6 月になくなっている．5 女末子は明治 19（1886）年に生まれ，明治 22（1889）年 1 月になくなっている[26)]．

長女多嘉の夫，陸軍中将高島友武は，吉井友實の 3 男であり，友武の姉澤子は大山巌の妻（澤子がなくなったあと，大山巌は山川浩の妹捨松と結婚する）である．また，友武の兄吉井幸藏の長男は歌人の吉井勇である．のちに勇の弟（吉井幸蔵 3 男）の友春が，高島友武・多嘉夫妻の養嗣子となり，多嘉の妹愛子の娘，初子と結婚する．友春は昭和 9（1934）年 10 月に離籍する[27)]．

吉井友實は，文政 11（1828）年 2 月 26 日に鹿児島城下高麗町，高島と同じ方限（ほうぎり）に生まれ，西郷隆盛，大久保利通の友人であり，明治 24（1891）年 4 月 22 日になくなっている．高島鞆之助が侍従となったときの宮内大丞であり，宮中改革に力を尽くす．明治 15（1882）年から同 17（1884）年まで日本鉄道株式会社社長を務め，明治 17 年に伯爵になっている[28)]．

26）『先賢伝記集』p. 75．霞会館華族家系大成編輯委員会編（1996）下，p. 14.
27）霞会館華族家系大成編輯委員会編（1996）下，p. 14.
28）日本史籍協会編（1973），p. 442.『三方限名士略傳』p. 25.

高島の3女球磨子は明治31（1898）年，かぞえ18歳のとき，31歳の樺山資英と結婚する．媒酌人は野津道貫夫妻（夫人は高島の妹）と上原勇作夫妻（夫人は野津の長女，高島の姪）である[29]．樺山資英の父樺山資雄は，栃木，佐賀，岐阜，宮城，宮崎の知事を歴任している．樺山資雄は春山休兵衛の三男で，のちに樺山の婿養子となる．資雄の実母幸子が高島家の出身である．また資雄の妻直子（祖父は樺山十郎太）は大久保利通のいとこである．なお直子は，昭和9（1934）年11月21日に92歳なくなっている[30]．

高島の父喜兵衛と資雄の実父春山休兵衛はいとこであり，高島の父喜兵衛の妹が春山家に嫁いでいるとある[31]．これが正しければ，資雄の母幸子は高島の父喜兵衛の妹になる．しかも春山休兵衛と高島喜兵衛はいとこであるから，春山休兵衛と幸子もいとこ同士である．

樺山資雄が西南戦争で，西郷軍に参加しなかったことについて次のようなエピソードが残されている[32]．

「夫人直子の従弟に藤井直次郎という陸軍大尉があった．明治6年征韓論が破裂して，西郷南洲が帰国したので，藤井大尉も辞職してその後を追い帰国にあたり，資雄氏を訪問，進退につき議論した．その際資雄氏は帰国の不得策を説くと，藤井大尉は『人間死すべき時に死せざれば死に勝る愧あり』と決然として豪語した．資雄氏は『それは各

29） 樺山資英伝刊行会編（1942）p. 316．のち，球磨子を敏子と改名する．しかしいつ改名したのかはわからない．天野（1968）p．5．また川﨑（2000）p. 195に，球磨子は資英の前妻とある．間違いである．

30） 樺山資英伝刊行会編（1942）p. 20, pp. 32–33, p. 52, p. 55, p. 258，日本史籍協会編（1983 C），p. 3．直子の父は樺山資始，母は皆吉鳳徳の5女秋である．大久保利通の母も皆吉鳳徳のむすめ，2女のフクである．したがって，直子は皆吉鳳徳の孫である．直子は父母が早くになくなり，父方の祖父母（樺山十郎太夫妻）に育てられる．

31） 同上，p. 258.

32） 同上，p. 36.

自の考だから已むをえない』として別れたということである」.

同姓の人がおおくて少々混乱するが，ここで樺山資雄と樺山資紀（高島が陸軍大臣の時，海軍大臣を務めている）の関係をみておくと，つぎのようである．先祖は同じ島津である．それがやがて樺山を名乗るようになり，その 7 代目の 2 男久安の直系の子孫が樺山資紀であり，久安からかぞえて 8 代目である．さらにこの久安の 3 男資辰の子孫が樺山資雄で，資辰から 9 代目である[33]．樺山資紀との関係を樺山資雄は，「何等縁故もなき」[34]と述べている．

資英は，明治元（1868）年に鹿児島市西田町に生まれ，昭和 16（1941）年になくなる．陸奥宗光の世話で，エール大学に入学し，エール大学で法学博士となる．陸奥に外交官になるように勧められ，「外交官はあなたのようにウソを吐かねばならぬから嫌だ」といって断ったというエピソードがある[35]．明治 28（1895）年樺山資紀台湾総督のもとで台湾総督府参事官，明治 29（1896）年には第二次松方内閣で高島拓殖務大臣の秘書官，その後，樺山資紀文相秘書官，第二次山本権兵衛内閣書記官長を歴任し，のち日露漁業相談役，国際電話株式会社社長となる[36]．

高島の 3 女愛子は，徳永重康と結婚する．愛子はのち徳永と離婚する[37]．徳永は，東京市芝区愛宕下に，吉原重隆と元子の 2 男として，明治 7（1874）年 8 月 20 日に生まれ，明治 27 年東京帝国大学理科大学動物学科に入学，地質学的部門を研究する．明治 30 年 7 月，東京帝国大学理科

33） 川崎（2000）pp. 194–195.
34） 樺山（1988），p. 48.『先賢伝記集』p. 81 に高島の親類筋として樺山資紀があるが，樺山資紀は親類ではない．
35） 樺山資英伝刊行会編（1942）p. 5.
36） 霞会館華族家系大成編輯委員会編（1996）下，p. 14，神田中学校友会（1901）p. 423，鹿児島県姓氏家系大辞典編纂委員会編（1994）p. 354，樺山資英伝刊行会編（1942）pp. 670–673.
37） 『帝国大学出身人名事典』2 巻，p. 1174.

大学動物学科を卒業している．理学博士，工学博士の学位をもち，早稲田大学理工学部教授，早稲田工手学校初代校長である[38]．重康の父方の祖父は江戸詰め薩摩藩士であり，父吉原重隆は島津公の祐筆を勤めていたということである[39]．高島は側近に「武人の後は友武に，政治家の後は資英をして継がしむ[40]」とかたっている．軍人，政治家のつぎは学者と考えたのかもしれない．

ところで，『日本人名大事典』に，徳永重康はのち徳永家を継いだとある．『帝国大学出身人名事典』には「大正 5 年長女初子の後を承けて家督を相続す」とあり，さらに「長女初子は子爵高島友武の家籍に入れり」[41]とある．初子は明治 36（1903）年 9 月に生まれている．このとき満 13 歳頃である．吉原重康が徳永重康となるのは，愛子と結婚したときか，それともそのあとからなのか，どちらなのかはわからない．徳永重康は，薩摩の生まれではなく，江戸の生まれである．徳永姓は，吉原の関係なのか，高島の関係なのかわからない．高島は大正 5（1916）年 1 月になくなっているので，初子が徳永姓を継いだのは高島の存命中である．したがって，初子が徳永の姓を継いだのには，高島の意思が存在しているものと推測される．

橋口によれば，高島の叔父に徳永姓がある．この叔父の徳永は，高島が訪問したために辺見十郎太に殺されることになる[42]．明治 10（1877）年 2

38） 大塚（1940）p. 30．大森（2007）p. 73．『日本人名大事典』p. 527，中国東北部の調査報告で，昭和 12 年に朝日文化賞を受けている．徳永（1999）p. 7 にも，東京芝で生まれたとあるので，重康が東京で生まれたことは間違いないとおもわれる．しかし南日本新聞社編（1969）上，p. 417 には，鹿児島市西田町出身（樺山資英と同じ）とあり，重康が「学士を一人つくるより，工手を二，三十人育てたほうが世のためだ」と考えていたとある．

39） 大森（2007）p. 73.

40） 樺山資英伝刊行会編（1942）p. 395.

41） 『帝国大学出身人名事典』2 巻，p. 1174.

42） 橋口（1932 C）p. 71.

月 26 日，西南戦争に際し，明治天皇は島津久光，忠義に勅使柳原前光を派遣する．この随員のひとりに陸軍大佐高島がいる．勅使一行は同年 3 月 9 日，鹿児島につき，役目を終えて同年 3 月 12 日に鹿児島を出る．このときに高島は叔父と従弟を訪ねている．同月 10 日には勅使が島津久光に会い，高島はこの日鹿児島市内に宿泊しているので[43]，高島が叔父徳永を訪ねたとすれば，10 日から 11 日のあいだと思われる．私学校に与することのないように従弟の春山（田布施郷区長）を説得し，ついで目の見えない叔父徳永を訪ねたとある．春山については，さきにみたように樺山資雄の実父は春山休兵衛，実母幸子は高島の父喜兵衛の妹である．と考えれば，高島のいとこ春山が存在することになる[44]．したがってこの春山は樺山資英とも親戚ということになる．

この時期，辺見十郎太は募兵のために別府晋介，淵辺高照[45]とともに鹿児島に帰っていた．勅使一行が鹿児島に滞在している間は隠れて難を避け，勅使一行が鹿児島を離れたのち，辺見十郎太はこれを聞き，高島の叔父と従弟を荒縄でくくり，惨殺させたとある[46]．橋口の述べていることが事実であれば，叔父徳永は高島が不用意に訪ねたために殺されることになる．この話が真実で，この叔父「徳永」に嗣子がなければ，その跡継ぎを自分の孫にするのはうなずける．

2

明治 28（1895）年 4 月 11 日の『国民新聞』に，以下の記事がのっている．

43） 参謀本部陸軍部編纂課編（1887）巻 22, p. 3.
44） 『先賢偉人伝』p. 40 に高島のいとこ「春山直光」が登場する．
45） 天保 11 年鹿児島城下高麗町に生まれる．明治 4 年，近衛陸軍少佐である．西南戦争で戦死する．『三方限名士略傳』pp. 32–33.

「曽って西南の一剛将なりし逸見十郎太の紀念児なる某を東京に呼び，懇ろに教訓至たらざるなく，以て当年竹馬の友たる地下の亡霊に報い，薩南の健児に将軍一片の侠骨香し一死為に惜しからずと歌せたる高島中将は，さきに征清に向いし年少仕官陸軍中尉中萬徳治氏が，火村の役天晴見事なる最期を遂げしに感激して止まず，深くその死を悼み，自ら其遺族を引受け看護せしは当時の一美談なり」とある．

逸見十郎太は，嘉永 2（1848）年に鹿児島で生まれ，戊辰戦争では城下二番隊の差引を村田新八とともに務めている[47]．藩兵の精鋭第 1 等が城下一番隊であり，そのつぎが城下二番隊である．若干 19 歳で城下二番隊の差引を務めた逸見は武将としての技量が優秀であったとおもわれる．西南戦争で西郷軍の小隊長となり，城山で西郷とともになくなっている．享年 29 歳である．戊辰戦争に参加し，奥羽にも出撃している．明治 4（1871）年に近衛陸軍大尉となり，明治 6（1873）年に鹿児島に帰っている．同年 5 月 5 日午前 1 時 20 分に皇居の火災[48]があったとき，品川の妓楼にいてこ

46） 鹿児島県編（1967）3 巻，p. 956, p. 1007. 3 月下旬に，1500 人の兵を集め，12 小隊，2 個大隊に編制して，八代口官軍の背後をついている．

47） 鹿児島県編（1967）3 巻，pp. 492–495.

48） 高島はこのとき 100 円を献金し，明治 17 年にこの賞として宮内省から銀杯 1 個を下賜されている．杉本編（1895），p. 229.

これから 15 年間，赤坂離宮（東京港区元赤坂）が仮皇居となる．翌年明治 7 年 12 月，皇城御造営の儀が出され，明治 21 年 10 月落成する．明治 22 年 1 月 11 日，移転式典がおこなわれる．総建坪 12703 坪，費用 560 万円余とある．中嶋（1992）p. 46．宮内庁編（1969）3, pp. 61–62, pp. 182–183. 17 年間もかけている．しかし三宅（1950）pp. 357–358 によれば，造営期間は 4 年半である．明治 17 年に地鎮祭を挙行し，明治 21 年 10 月に竣工をみている．明治 17 年までは，和風建築か洋風建築かで議論があり，それが決まるまでの時間が 11 年間要したことになる．また費用は，中嶋とは異なり 396 万円余とある．

内川・松島監修（1986）所収，「ケース写真説明」によると，赤坂離宮はもともと紀伊藩主徳川氏の上屋敷であったものを，明治 5 年皇室に献上したものである．のち明治 32 年 7 月に片山東熊の設計で，東宮御所として↗

れを知らずに，翌朝に帰営した．近衛都督は西郷隆盛で，近衛局長官は篠原国幹である．無断外出が問題となり，糾問を受けるが西郷隆盛の助けで死を免れている[49]．ところで，軍律は厳しく酔って歩哨に立っただけで，切腹させられたということを考えると，寛大な処置である．

西郷が参議，近衛都督の職を辞すのが，同年 10 月 24 日である．辺見もこの事件のため陸軍を辞め，西郷と相前後して鹿児島に帰っている．高島が後年よく語ったといわれる，宮中で背後から塩をまかれたのをこらえたゆえに，いまの自分があるという話はこのあたりのことが高島の脳裏にあったのかもしれない[50]．

記事中の「逸見十郎太の紀念児なる某」とは，辺見勇彦（ゆうひこ）のことである．明治 10（1877）年，父十郎太が西郷隆盛らとともに城山に立てこもっているときに生まれる．このことを，十郎太の弟が官軍の包囲網をかいくぐって城山の十郎太にしらせ，これによって十郎太は男児誕生を知り，妻と子どもたちに遺書とお金を下僕に託す．下僕はまた官軍の目をかいくぐって十郎太の妻ハヤ子にこれを届ける．勇彦の姉和歌子はこのときに 4 歳である．和歌子は 16 歳で小学校教員となり，のち札幌農学校助教授時任（ときむね）一彦[51]と結婚する．

↘　起工し，明治 42 年 6 月に洋風宮殿が完成する．地下一階，地上 2 階，453 坪，経費 510 万円である．離宮として現在あるのは，桂，修学院離宮と赤坂離宮（迎賓館）だけである．赤坂離宮は完成してから，東宮御所として使用されたことはなく，一時的に他用途に使用されたことがあるが，ながらく空き家のままであった．それが修復されて昭和 49 年 4 月迎賓館となる．

49）近世名将言行録刊行会（1934）p. 406．干河岸貫一（1902）p. 97，大月（1902）p. 157 において，助けたのは桐野利秋であると述べている．

50）長田（1901）pp. 603–604.

51）辺見（1931）p. 17．南日本新聞社編（1969）上，p. 385 によると，時任は明治 4 年に生まれ，札幌農学校を卒業する．明治 38 年に教授になり，大正 3 年に農学博士となる．のち北海道大学に転じ，農学部長を務める．著書に『泥炭地改良および泥炭利用論』がある．北海道大学前の自宅に広大なバラ園を持つ，バラ研究家でもある．

勇彦が16歳のとき，士官学校に入学するために上京し，高島の世話になる．勇彦はつぎのように述べている[52]．

「一時順逆を異にして，官賊とはなったけれど，決して南洲翁等の真精神は，王師に抗するものではなかったのだ．で，せめてこれら各将連の遺子だけでも，われら生存栄達者の，庇護援助すべきが当然の義務ではあるまいか？これがかれらの肚だったのである．

で，薩長連合内閣で，当時時めく陸軍大臣高島鞆之助将軍が，イの一番に我輩を引き取って，大いに厚遇してくれた．

勉強の一室を与えられ，学資は言わずもがな，学校にも何不足なく出して貰った」．

勇彦が16歳で，高島が陸軍大臣ということは，明治25（1892）年ということになる．高島が世話をした理由は，勇彦が述べているとおりと推察できる．薩摩閥としてだれかが世話をすることを決め，高島が1番に手を上げたということであろう．さきに触れたように，橋口によれば，西南戦争のおり，高島のいとこ春山と高島の叔父徳永は，辺見十郎太のために捕らえられて，殺害されたとある．これが事実であれば，それにもかかわらず，高島は辺見十郎太の遺児勇彦を世話したということになる．

明治25（1892）年2月には，第2回総選挙があり，激しい選挙干渉がおこなわれた時期である．鹿児島はとくに激しい選挙干渉がおこなわれたところである．鹿児島の民党の中心には私学校の残党がいる．明治14（1881）年，特赦により出獄してきた河野主一郎[53]を社長として，三州社が

52） 辺見（1931）p. 17.

53） 河野は負傷入院中の逸見十郎太と西郷隆盛助命の使節派遣を諮り，みずから使者として山野田一輔をつれ，明治10年9月21日，高島の別働第一旅団に降伏している．それ以来捕虜となり，服役する．鹿児島県編（1967）3巻，p. 999．覚張（1889）p. 268．鹿児島城下高麗町に，弘化3年10月 ↗

設立される．これをけん制するために，薩摩閥は在京鹿児島県人を中心とした郷友会を組織して対抗する．

三州社と郷友会に触れる前に，鹿児島学校に言及しておく．西南戦争で西郷軍の奇兵隊の隊長であった野村忍介[54]の努力によって，明治 14（1881）年 8 月，公立鹿児島学校が設立されるが，これに高島も多少関係している．芳によれば[55]，鹿児島藩が東京に派遣した御親兵のために蓄積していた資金があり，その後御親兵が廃止となったため，その蓄積資金を高島，野津道貫，大山巌，西郷従道等が管理していたとのことである．これを鹿児島学校設立に使用することを野村は野津に依頼する．この依頼の返事をするのが西寛二郎大佐（戊辰戦争の遊撃三番隊長）である．西は，大久保利通在世の頃からこの資金は，鹿児島の小学校の義捐金として使用することに決まっていたことを伝える．さらに，野村は警視総監樺山資紀を訪ね，資金利用を依頼する．これらの努力の後，この資金の管理は鹿児島県庁に委託され，鹿児島学校設立資金として使用されることになる．さらに，学校敷地として，鹿児島旧分営跡地の払い下げを願い出ている．この窓口が工兵局長今井兼利（大阪偕行社附属小学校初代設置者）である．今井も学校設立に賛成して，跡地が学校敷地として利用できるように便宜をはかったということである．

野村が東京に行くのが，明治 13（1880）年 8 月頃であり，帰鹿するのが明治 14（1881）年 1 月である．途中大阪に立ち寄っている[56]．高島は，明治 13 年 4 月 29 日から翌年 2 月 7 日までは熊本鎮台司令長官である．東

↘　に生まれる．明治 4 年，近衛陸軍大佐である．のち日本水産会社社長，青森県知事等を勤める．『三方限名士略傳』p. 33.

54）鹿児島県編（1967）3 巻，p.964．河野と野村等が主唱して，九州各地に散在する 1800 余人の遺骨を浄光明寺墓地に改葬している．碑文は副島種臣が書いている．同上，p. 1006.

55）芳（1983）pp. 66–67, p. 73.

56）同上，pp.65–67.

京，大阪，熊本で野村にあったかどうかはわからないが，鹿児島は熊本鎮台の管轄であるので，2 人があっている可能性はあるとおもわれる．

明治 14（1881）年末，西南戦争のおり西郷軍の編制委員のひとりであり，西郷軍の小隊長を勤めた河野主一郎が特赦で鹿児島に帰る．これを機に，私学校の残党が河野を主盟として三州社を設立する．三州社の名称は竹崎一二が発案する．発起人は，伊東祐高，中原萬次，河野半蔵，美代助左衛門，樺山資美，伊地知壮之助，児玉軍治等である．公立鹿児島学校に対抗して，三州社は教育機関として，私立三州義塾を設立する[57]．

これに対して，郷友会もほぼ同時期に誕生する．在京鹿児島県人の親睦会が明治 14（1881）年 11 月 3 日におこなわれたときに郷友会設立が確認される．郷友会の趣意書は次のようなものである[58]．

「人の性を天に享くるや，各々智識を固有し，自主自養の資備わざる者なしと雖も，父母ありて之を生育し，社会ありて之を教誨するにあらざれば，焉ぞ能く其天職を全うし，独立生存の道遂ぐるを得可けんや，故に文明の邦域に於ける，同友胥議して協会を興し，社会の便益を謀らざる者なし，各国習慣を異にし，制度文物同一ならず，又其新保の度均しからざる者あるも，四民同権，農工商賈各其好む処の事業に就き，拮据経営，独立生存の業を勉むるに於いては一なり，況や大志を抱き，身文武の職に就き邦家に尽す所あらんと欲する者は，更に其道を講究し，其業を修整するにあらざれば，其責に任じ其職を尽すを得ざるや必せり，抑も我郷里鹿児島の子弟，数百年来一郷里にして一藩治の下に生長し，意気相投じ，其交誼の厚き，一旦事あるや死生を共にするに至りしも，今や維新の盛運に際会し，我郷友多く其職を異にし，其業を殊にするを以て，遂に各地に転住するに至れり，然り

57） 薩藩史料調査会編（1918）pp. 19–22, p. 35.
58） 同上，p. 37–38.

と雖も，旧藩主歴世休養生息の恩と同郷先輩諸君の率先竭力の偉勲を追懐すれば，此に報ずるの義務なかる可らず，於是乎，在京同感の郷友相議して，郷里子弟の為に教育，授産の協会を起し，名けて郷友会と曰う，此会の主旨たるや，偏なく，党なく，至公至平に據り，実着有為に基き，我郷友有志と益情誼を厚くし，相共に扶持して，大に補益する所あらんとするに在り，請う，同郷有志の輩本会の旨趣に翼賛し，協心戮力して子弟を誘掖し，授産の実施を計画ありて，之を永遠に達し，以て其結果を全うせんことを」.

また，明治 15（1882）年 1 月の郷友会緒言[59]には，

「数百年来同く一郷里に居住し，一藩治の下に成長して死生をともにし，休戚を通ずるの情義ありしも，維新の盛運に際会し，多くは東京各所に転住し，各自職を異にし，業を殊にし，長幼年を均しくせざるを以て，或は終年相見るを得ず，途中相逢て誰人たるを知らざるに至れり，況んや郷里在住の如き，東西に隔離し声息を通ずるに由なく，往時を回顧して感旧の情に禁ぜず，是に於てか，今般相議して郷友会を設け，一年に数次会集し，長幼貴賤の別なく互いに懇親の情を通じ，此会をして永年に継続せしめ，聊か裨益する所あらんと欲す，因て毎月若干の金円を醵して之を儲蓄し，東京・郷里を論ぜず，子弟の才徳ある者を奨励して其業を遂げしめ，且は授産の方法を議し，小を積みて大となし，近きより遠きに及ぼし，漸次盛大に至らしめんとす，庶幾くば旧事の情義を全くして，各家祖先の神霊も地下に喜悦する所あらんことを，諸公幸にして其衷情を察し，之を翼賛して成功を遂げしめられよ，

明治 15 年 1 月

59） 鹿児島県史料刊行委員会編（2001）p. 49.

鹿児島郷友会幹事」

とある．

また，郷友会会則[60]の第 1 条は，「本会は会員子弟の教育と就産の事を議し，漸次充実せしむるを以て主要となす」とある．

郷友会幹事には，吉井友実，内田正風，仁禮景範，海江田信義，伊地知貞馨，石原近義，奈良原繁，野津道貫が名を連ねている．庶務委員 8 人の中に山本権兵衛，河島醇が名を連ねている．また郷友会常置委員 49 人のひとりとして今井兼利，末弘直方の名が記載されている[61]．郷友会長は仁禮景範である[62]．

郷友会が鹿児島に現れるのは明治 15（1882）年冬である．鹿児島市，川内，加治木，出水の 4 ヵ所に支部を設立して，活動を始める．

これよりすこし前，明治 14（1881）年 8 月に，高島は野津道貫と 2 人で，54,200 円 31 銭 4 厘を公立鹿児島学校費として寄付している[63]．『国乃礎』[64]に，明治 14（1879）年 7 月 25 日，鹿児島県下学校資金として 150 円を寄付したことで，銀杯 1 個を下賜されたとある．同年 12 月 28 日には，鹿児島県学校資金として，24,163 円 60 銭余を寄付したことで，金杯 1 組を下賜されたとある．おそらく，野津と 2 人で寄付した 54,200 円 31 銭 4 厘うち，高島が 24,163 円 60 銭余を寄付したということであろう．明治 12 年 5 月に在京有志 51 人が 8,543 円 87 銭 5 厘を鹿児島県下学校資金として寄付している．高島の 150 円の寄付はこのときのものと推測できる．この高島の寄付金は，他の寄付金とあわせて鹿児島高等中学造士館の維持費と

60） 薩藩史料調査会（1918）p. 49.
61） 同，p. 51.
62） 芳（1983）p. 90.
63） 鹿児島県編（1967）4 巻，p. 254，鹿児島県史料刊行委員会編（2001）p. 56.
64） 杉本勝二郎編（1895）p. 228.

して使用されることになる[65]．このときの島津忠義願書のなかに，「普く県下子弟を輩出するの素を磨き徳義を練り，以て国家有為の人材を輩出するの素をなさしめ」という言葉がある[66]．

在京鹿児島県人が，鹿児島に第二の私学校が育つのを防ぐ策のひとつとして，西南戦争の遺児の世話をすることにしたとしてもおかしくはない．高島は選挙干渉積極派といわれている人物であり，恩讐をこえて，第二の私学校の芽を絶つ一環として，第二の私学校の中心となりそうな人材を 1 人でも減らし，同時にわが派の人材を育てようとして勇彦の世話をしたとも考えられる．

しかしながら，勇彦は勉強せず，高島の家の使用人の悪習をまねてさらに悪くなる恐れがあるとの理由で，高島の家をだされて，上原勇作（のちに野津道貫の長女槇子，すなわち高島の姪と結婚する）の世話になる．ここも追い出されて，各私立中学の寄宿生活を転々として味わうこととなる．三島中洲（1830 年－1919 年）の二松学舎（麹町区一番町）に学ぶのもこのころである[67]．

「その頃の二松学舎といえば，都下においても有名な最下級の貧書生集合の破れ塾で，宿料月謝食料一切をひっくるめて，驚くなかれ月僅かに五円足らず，障子は破れ放題，板骨は各自随意に寒夜の燃料に焚き，一汁一菜の請負制度であったが，毎朝の味噌汁が鏡のごとく澄み渡って水が多いの，鰯が小形で舌を刺したのという，不平不満が昂じて，（略）食器は宙を飛び，食卓は転壊するうちに，猛勇の士は更に駒を陣頭に進め，汁バケツに尿水を満た」し，放校処分となる[68]．札幌で姉夫婦の世話になりなが

65） 鹿児島県編（1967）4, p. 254，鹿児島県史料刊行委員会編（2001）p. 56.
66） 同上，p. 56.
67） 辺見（1931）pp. 19–20．二松学舎は，三島中洲 1 名を教員として，明治 10 年 10 月 10 日に創建される．二松学舎卒業生に嘉納治五郎，夏目漱石，中江兆民，犬養毅等がいる．二松学舎百年史編集委員会編（1977）p. 3, pp. 171–173.
68） この時期はおそらく，明治 30 年 11 月 7 日とおもわれる．同上，p. 286.

ら，父のおさななじみ，第 7 師団長永山武四郎中将の勧めで，札幌農学校附属土木工科に入学するが，ここも 2 年間でやめる．ちなみに，勇彦の卒業証書は小学校 8 年間の卒業証書が唯一のものであり，それも受け持ち教員の情けで小学校の卒業も可能となる．

下田歌子の助力で，中国語を勉強し，明治 35（1902）年，上海に日本の文献を中国語に翻訳して販売する作新社を開設する．のち日露戦争中，「洪崙波（こうろんぱ）」の名で，馬賊集団を率いて，東蒙古一帯の特殊任務，敵情視察，鉄道破壊工作にあたる[69]．

つぎは同じ国民新聞の記事にある，中萬徳治歩兵中尉のことである．中萬徳治歩兵中尉は，明治 27（1894）年に陸軍監軍部，陸軍幼年学校生徒隊中隊の中隊附歩兵中尉である．同年には高島友武歩兵中尉が陸軍幼年学校生徒隊中隊の中隊附に配属されている．中萬中尉と高島の養嗣子友武は陸軍幼年学校生徒隊中隊の同僚であり，中萬徳治歩兵中尉は，経緯はわからないが（おそらく志願したとおもわれる），日清戦争に出征し戦死する．中萬中尉は高島の自宅を訪問したことがあるかもしれないし，少なくとも友武から中萬中萬のことを聞いていたと推測される．高島は，中萬徳治歩兵中尉を直接あるいは間接に知っていたとおもわれる．

高島友武は，日露戦争に陸軍歩兵中佐，第 3 師団歩兵第 6 連隊第 3 大隊長として出征している．明治 37（1904）年 10 月 14 日，第 2 軍司令官から感状を与えられる働きをしている[70]．

3

橋口によると，16 歳の春に，藩主島津忠義ではなく，久光の嗣子，島津忠済（ただなり）（1855 年－1915 年）の児小姓に抜擢されるとある[71]．島津忠済は，

69） 辺見（1931）p. 12，東亜同文会編（1973）p. 1233–1244.
70） 名古屋偕行社編（1909）pp. 26–27.

島津久光の第 9 子である．島津久光は，明治 4（1871）年に分家して「玉里家」を興し，この玉里島津家のあとを継ぐのが忠済である．さきに引用した「将軍は幼にして穎悟，（中略）毎日御殿に仕えた」[72] とあるのは，このことをさすとおもわれるが，どうであろう．

高島 16 歳のときであれば，「満」ならば 1860 年（11 月以降 1861 年 11 月まで），「かぞえ」ならば 1859 年である．橋口ならば，「かぞえ」と考えられる．高島がかぞえの 16 歳とすると安政 6（1859）年になる．この年島津忠濟はかぞえで 5 歳である．安政 6（1859）年，島津斉興が藩政の後見役であり，久光はいまだ重冨家である．同年 9 月に島津斉興が逝去する．久光が藩政補佐となり，さらに国父となり，宗家に復帰するのは，文久元（1861）年の 4 月である．宗家に復帰するとともに，忠教から久光に改名し，久光の待遇は藩主と同格となる．そして重冨家は久光の 4 男忠鑑が継ぐことになる．このとき藩主と同格の扱いとなる久光の 6 男島津忠濟は，長兄が藩主であり，次兄が島津久宝の養嗣子であり，3 兄がなくなり，4 兄忠鑑が重富家を継ぎ，5 兄忠欽が島津忠敬の養嗣子となるので，久光の嗣子としての資格を持つことになる．さきにふれたように久光は，明治 4（1871）年に玉里家を興し，忠濟がのちに同家を継いでいる．高島が，久光の嗣子島津忠濟つきの児小姓になったとすれば久光が宗家に復帰したときと推察される．文久元（1861）年であれば，高島はかぞえで 18 歳である．

文久元（1861）年には，久光も島津忠濟もまだ重冨邸に住んでいる．久光が，二の丸に移住するのは，文久 2（1862）年 2 月 24 日である．文久 2 年 3 月に高島は，島津久光守衛として，京都に行っているので，文久元年，高島はかぞえで 18 歳（満 16 歳）の春 4 月に，かぞえで 7 歳の忠濟つき児小姓になり，久光が二の丸に移居する文久 2 年 2 月までは重冨邸に行

71） 橋口（1932 A）p. 40.
72） 樺山資英伝刊行会編（1942）p. 258.

くことになったと考えられる．

ところで，橋口のいう児小姓というのはよくわからない．藩主忠義の嫡子島津忠重は，ちょうど5歳くらいのときに，遊び相手として3人の少年がいたと述べている[73]．これは藩，藩主という制度・身分がなくなった後の明治の話である．高島の場合は明治の話ではなく，まだ藩，藩主が存在していた時代の話である．大勢の藩士の中からおそらく満16歳の青年も，国父久光の嗣子島津忠濟のお守り役を任ぜられたものとおもわれる．

文久2（1862）年3月10日，『枢密院高等官履歴』[74]によれば，高島は，満17歳で，島津久光の守衛として，京都に上ることになる．戦士として活躍の場をえると同時に，高島の教育施設における学業[75]はこのとき修了したものとおもわれる．このとき，従者約1000人のなかから132人が，久光の駕籠の前後を護衛するものとして選ばれている[76]．「守衛」の意味を，久光の駕籠の前後を護衛するものと解釈すれば，高島はこの任に選ばれている可能性はあることになる．松方正義は久光の駕籠の周りを護衛[77]していたひとりであるが，高島については不確定である．大久保利通の文書[78]に「同士姓名録」がある．何のために，いつ書いたものか，明記されていない．文久2年に書いたもので，久光上京の随行者を大久保が誠忠組の同士の中から推薦したのではないかとの編者による説明がある．この56

73） 東西文明社編（1958）p. 148.
74） 3巻，p. 163.
75） 高島が造士館にいつから通い，いつ終了したのかは不確定である．大久保監修（1989），p. 23に「当時の士風武弁是競い幼児日用に文学等の教訓書を学ぶもの，青年にして書籍無縁を挟むものあるにこれを嘲笑疎外せし」とある．のちの高島の言動をみると「当時の士風」そのものとおもわれるがどうであろう．
76） 高島（1937）p. 127.
77） 大久保監修（1989）pp. 25–26，に松方正義が，万延元年の島津忠義の参勤のさい，「候は御家老座書役を以て守衛方二十五人」に選ばれたとの表現がある．しかし，久光のさいには「御供」と表現している．
78） 日本史籍協会編（1983 B），pp. 66–69.

人の名簿に高島の名はない．しかし高島一次の名はある．一次は高島のいとこにあたる[79]．この時点で，大久保利通を核とする誠忠組（薩摩藩の尊王攘夷派で，水戸藩士に呼応して脱藩挙兵を計画していたグループ）の勢力は拡大していたとおもわれる．高島が 132 人のなかにいたかどうかはわからないが，高島は久光上京の随行者の一人として選ばれている．これらを考えると，高島は誠忠組の正式な同士，あるいは重要な同士ではないが，かれらに近いところにいたのは間違いないとおもわれる．このときの随行者には，小松帯刀，中山尚之助，大久保利通，伊地知正治等がいる．西郷隆盛は村田新八とともに，行列に先行している．同年 4 月に寺田屋事件が起きる．誠忠組の脱藩強硬派（有馬新七，森山新五左衛門等）が久光の命を受けた同じ誠忠組の同士（奈良原喜八郎，鈴木勇右衛門，大山綱良等）に上意打ちされた事件である．誠忠組の強硬派はこれで粛清され，結果として，誠忠組は大久保利通を中心とする組織にまとめられることになる．篠原国幹，大山巌，西郷従道，三島通庸等は脱藩強硬派にくみし，このとき寺田屋にいたために謹慎処分を受けている[80]．高島はこの事件にも関係していない．

ところで，これよりさき安政 6（1859）年 11 月 5 日に，島津茂久（忠義）自筆の諭書[81]が脱藩・挙兵を策していた誠忠組の有志一同にだされ，これ以降大久保利通，西郷隆盛を中心とする誠忠組の同志が重用されるようになる．このときの同士姓名録 48 人のなかにも，高島の名は記載され

79）『先賢伝記集』1 巻，p. 75 の系図によれば，一次の父新介は，高島の父喜兵衛と兄弟（おそらく新介が兄）である．喜兵衛には，兄新介と妹幸子がいることになる．一次は明治 30 年に 64 歳でなくなっている．公爵島津家編纂所編（1968）中，pp. 835–837 に一次の名が開成所掛員として記載されている．また海軍掛員のなかに高島嘉兵衛の名がある．また一次には明治 11 年 4 月に鹿児島県令岩村通俊に小学校再建資金の課出方法について問題があることを訴えた書類が残っている．鹿児島県史料刊行委員会編（2001）pp. 11–18.

80）鹿児島県編（1967）3 巻，p. 334.

81）同上，pp. 288–289.

ていない[82]．

島津久光はこれにより，後顧の憂いがなくなり公武合体を推し進めることになる．公武合体派とは，尊王佐幕派である．これと尊皇倒幕派とは相容れない関係にある．尊皇佐幕派のなかの穏健な攘夷派が孝明天皇であり，開国派が久光等である．久光は，文久 2（1862）年 5 月に公武合体推進のひとつとして一橋慶喜の登用を求め，勅使大原重徳とともに江戸に行く．勅使の護衛役として，吉井友実，野津鎮雄等 10 人が選ばれている[83]．同年 8 月に生麦事件がおきている．役目を終えて，京都に帰る久光の行列さきを乱したイギリス人リチャードソンに，奈良原喜左衛門が刀を浴びせ，致命傷をおわせ，久木村治休がさらに太刀を振るい，最後に海江田信義がリチャードソンに止めを刺している[84]．奈良原喜左衛門は示現流の名手[85]であり，誠忠組の同士である．海江田信義もまた誠忠組の同士である．島津久光は，同年閏 8 月に孝明天皇から褒勅とともに刀を下賜されている．大久保，奈良原喜左衛門，海江田信義，吉井友実等も参内に随従を許された 11 人のなかにいる[86]．久光は，同年 9 月 7 日に鹿児島に帰る．高島が久光の江戸に行く行列の従者，大原重徳の護衛のなかにいたかどうかはわからないが，高島はそのまま京都にとどまることになる．

文久 3（1863）年 5 月 20 日，過激な攘夷論者とみられた姉小路公知が，御所の朔平門外で初更（午後 7 時から 9 時）の頃，3 人の賊に襲われて刺殺される．賊は刀と下駄を残して去る．刀の柄頭に，藤原の 2 字と縁に鎮英の 2 字が金ではめ込んだもので，鎮英は田中新兵衛の実名であり，さらに

82） 日本史籍協会編（1983 B）pp. 32–34．鹿児島県編（1967）3 巻，pp. 292–294.
83） 鹿児島県編（1967）3 巻，p. 338．吉井，野津鎮雄ともに誠忠組の同士である．
84） 南日本新聞社編（1967）上，pp. 186–187.
85） 同上，p. 153.
86） 鹿児島県編（1967）3 巻，p. 345.

刀は田中のものと訴えるものがあり，仁禮景範，田中新兵衛，仁禮の従者が逮捕されることになる．田中はどういう理由かわからないが，奉行所で自殺する．ところでこの田中は士族の出ではない．誠忠組が安政6年に脱藩を策したとき，一同は舟に乗って大阪まで行くことを考え，この船頭に田中新兵衛が予定されていた[87]．とにもかくにもそのために薩摩藩は乾門警護をやめさせられ，9門からの宮中出入りを禁止される[88]．橋口に，仁禮景範を助けようとして，桐野利秋とともに行動した高島について述べている箇所がある[89]．

文久3（1863）年7月2日，イギリス艦隊7隻が鹿児島湾に現れる．薩英戦争である．このとき，高島は，桐野利秋，野津道貫，三島通庸等とともに，京都護衛として選ばれ，約30人で在京している[90]．薩英戦争を知り，薩摩に帰るべきか京都に留まるべきか甲論乙駁の末，三島通庸のイギリスとの戦争に薩摩が負けてしまえば，京都を守る意味がないという意見が入れられ，薩摩に帰ることに決める．薩摩に帰ることを決めてすぐ，伏見で高崎正風が薩英戦争の結果を伝えにきたのに出会い，高崎から薩英戦争に勝利したことを聞き藩邸に引き返している[91]．

文久3（1863）年8月には，公武合体派，薩摩藩・会津藩連合のクーデターがおこる．8月18日の政変である．これにより長州藩の堺町御門の警備は，薩摩藩に変わり，京都において薩摩藩が復権する．当時在京の薩

87）南日本新聞社編（1967）上，pp. 163–164．田中は薬種商の出，あるいは漁師の子どもともいわれている．田中は，前年（文久2年）7月に，九条家の家士島田左近を佐幕派として暗殺している．鹿児島県編（1967）3巻，p. 346．日本史籍協会編（1980）p. 205に，田中は仁禮の家来とある．

88）山川（1965）pp. 118–122，鹿児島県編（1967）2巻，p. 192.

89）橋口（1932 A）pp. 40–41．田中と仁禮の2人を助けようとしたのではない．このとき自死するのは田中であるにもかかわらず，田中には触れず，仁禮を助けようとしたとある．

90）鹿児島県維新史料編さん所編（1973）p. 702.

91）文久3（1863）年11月1日，薩摩藩がイギリスに10万ドルを支払うことで，薩英協定が成立する．

摩の兵士は，約 120 人で，隊長は鈴木勇右衛門（誠忠組同士で，寺田屋事件の打ち手の一人）で，高島もそのなかにいる．桐野利秋らが，長州藩の参内禁止，長州藩の堺町門護衛罷免の朝旨を堺町門護衛の長州藩士に伝える[92]．同年 9 月 5 日に親兵解散となり，高島は帰藩している[93]．

あけて元治元（1864）年 1 月，高島は奥小姓となる．満 19 歳である．橋口には，藩侯護衛として，京都に行くとある[94]．高島は，藩主忠義の奥小姓になったということであろう．なぜなら忠義はこのとき鹿児島であり，国父久光は前年 10 月から元治元年 4 月まで約半年間京都に滞在している（城下士 6 組，郷士 6 組を率いて入京している）[95]．『国乃礎』[96]には，元治元年 1 月上京とある．藩侯護衛かどうかはおくとして，上京したのは間違いなさそうである．またこのとき伊地知正治，黒田清綱等の懇願により西郷隆盛が許されて，同年 3 月 19 日，京都で久光に会い，軍賦役に補せられる．そして久光退京（同年 4 月 18 日）後の京都を任せられる．このとき，京都に留まり，京都御所を護衛するのは，久光の二男久治，小松清廉，伊地知正治，吉井友實，そして西郷隆盛である．これ以来，薩摩藩の流れは公武合体派から，討幕派に変化していく[97]．

元治元（1864）年 6 月 5 日，池田屋事件が起こる．新撰組により，長州藩士を含む 9 人が殺害され，20 数人が逮捕される．これを受けて同年 7 月 19 日に「蛤御門の変」がおこる．この蛤御門の変に高島は参加したのか，それともしていないのか．高島はつぎのように述べている．

92） 同上，薩英戦争後で京都の藩士数が増加している．鹿児島県維新史料編さん所編（1974）p. 858.
93） 『枢密院高等官履歴』3 巻，p. 163.
94） 橋口（1932 A）p. 40.
95） 鹿児島県編（1967）3 巻，p. 364.
96） 杉本編（1895）p. 225.
97） 鹿児島県編（1967）3 巻，p. 376, p. 379.

「初陣は彼の鳥羽伏見の役，軍の大将は南洲翁ぢやった」[98]．

これによると，高島は鳥羽伏見の戦いまで戦争に参加していないことになる．高島が江戸，長崎，大阪等にいたとは考えにくいので，このときは京都か鹿児島にいたと考えるのが順当である．『国乃礎』[99]によると，元治元（1864）年 1 月に上京して，同年冬に帰藩したとある．これが正しいならば，この期間，高島は京都の藩邸にいたことになる．一方は高島の談話であり，他方は高島の履歴である．当然両方ともに高島の確認を経ているとおもわれる．両方が正しいとするならば，高島は京都にいたけれど，蛤御門の変には出陣していないということである[100]．しかしながら，不在証明は高島の談話だけであり，他の記録はないので，蛤御門の変には出陣していないと確定できるものではない．このとき出陣したのは，乾門守護のため，城下一組，隈之城，水引，蒲生，六ヶ郷混合の 5 組と，天竜寺に向けて出陣しのち反転する城下一組，出水，高岡，阿久根，綾穆佐，樋脇の 6 組，中原尚勇の奇兵隊だけである[101]．久光は城下士 6 組を率いて上京し，この多くを京都に残し帰藩しているので，西郷はそのすべての兵を投

98） 田中（1909）p. 220．さらに同書，p. 217 で「又た人一人も斬つて事もない．白刃一揮，首をブチ斬るのは，或は愉快かも知れんが，併し罪悪じゃ．我輩はかってそんな罪悪を犯した事はない」と述べている．白洲（1999）pp. 9–11，に示現流の達人樺山資紀が若いころ，友を見捨てて逃げた知人の首を一太刀で切り落としたという話が出ている．

99） 杉本編（1895）p. 225.

100） 『先賢伝記集』p. 43，に「高島三七は中立売門を守っていた」とあるが，すくなくとも，高島が中立売門を守ることはない．薩摩藩が守っていたのは乾門・公卿門であり，ここから薩摩兵は，苦戦している筑前兵の守る中立売門，会津兵の守る蛤御門，桑名兵の守る下立売門の援軍に向かい，西郷の命令で大山巌が 4 門の大砲を打ち込んで長州兵を退けている．鹿児島県維新史料編纂所編（1974）2 巻，pp. 384–385，高島編（1937）pp. 240–250．このとき海江田信義とともに「仁禮某」が奮戦している．覚張（1889）p. 40，日本史籍協会編（1980）pp. 302–303.

101） 鹿児島県編（1967）3 巻，pp. 386–388.

入しなかったということになる．外城士は久光に随従して上京したものより増加しているので，かれらはすでに在京していたか，あとから上京したものとおもわれる．

高島は第 1 次長州戦争には参加したのか．元治元（1864）年 8 月 13 日，長州藩追討の勅命を受けて，幕府は薩摩藩に出動を命じる．これをうけて 8 月 26 日に出動するのは，城下一番，城下二番，城下三番，城下六番，大口，志布志，国分，清水，田布施，末吉，帖佐，大崎，高山の合計 11 組である．同年 10 月 2 日，西郷隆盛は側役に昇進するとともに，名を大島吉之助から西郷隆盛に戻す．同年 10 月 29 日，出軍計画を改め，城下一番，城下二番，城下三番，城下四番，出水，志布志，田布施，末吉，帖佐，大崎，高山に出動命令を出し，滞京中の藩兵も救援隊として出動することになり，大目付高橋種徳，小姓與番頭吉利群吉が引率して，同年 11 月 1 日に出動し，筑前蘆屋に集結している．同年 12 月 27 日に征長総督徳川慶勝は，広島で追討軍に撤兵帰休令を出す．これを受けて西郷隆盛は，同月 28 日に広島を出発し，小倉の副将府に解兵令を伝え，蘆屋の薩摩兵にも伝え，元治 2（慶応元）年 1 月 4 日に小倉から帰藩している[102]．高島はさきにみたように，『国乃礎』に元治元年冬，帰藩するとある．おそらく，高島は第 1 次長州戦争には従軍している．しかし，このとき戦闘経験はなかったとおもわれる．高島は元治元年 12 月末に帰藩命令を受けて，同年 12 月末かおそくとも翌年 1 月初旬には鹿児島に帰っている．

以上みてきたように，高島は，文久 3（1862）年 3 月 10 日，満 17 歳で上京し，文久 3（1863）年 9 月 5 日に帰藩している．翌元治元（1864）年 1 月に上京し，同年冬に帰藩している．そして慶応 3 年（1867）年春（11 月かもしれない）に，満 22 歳で上京している．高島が，文久 3（1862）年から慶応 3（1867）年の間，満 17 歳から満 22 歳までの間に，鹿児島にいたのは，満 17 歳の文久 2 年に 1 月，2 月の 2 ヶ月間，文久 3 年の 9 月から 12

102） 同上，pp. 386–397.

月の 4 ヶ月間，慶応元年，慶応 2 年の満 20 歳，21 歳の 2 年間である．満 17 歳から満 22 歳の間，6 年間の在藩期間は 2 年半である．

慶応元（1865）年 3 月に，薩摩藩は 19 人の留学生をイギリスに送っている．監督の新納久修，学頭の町田久成，そして寺島宗則，五代友厚，堀孝之，村橋直衛，畠山義成，名越時成，鮫島尚信，田中盛明，中村博愛，森有礼，吉田清成，松村淳蔵，高見彌一，東郷愛之進，町田實積，町田清次郎，長沢鼎の 19 人である[103]．このときにおいても，攘夷論者 3 人，畠山義成，高橋要，島津織之介は留学を断っている．久光の説得によって，畠山義成は参加することになる．高橋要と島津織之介は承諾しないため，2 人に代えて村橋直衛，名越時成が参加することになる[104]．文久 2（1862）年，寺田屋で倒幕論者を上意討ちにできても，慶応元年，藩の方針に逆らう攘夷論者を説得できないし，処罰もできない状況である．この時点においても，まだまだ攘夷論者の勢力はあったということであろう．高島は，満 20 歳，21 歳の 2 年間，慶応元年，同 2 年をどのようにすごしたのか．この時点で，高島が開国論者であったのか，攘夷論者であったのか，いずれであったのかわからない．

4

慶応 3（1867）年 10 月 13 日，鹿児島藩に「倒幕」の密勅がくだされ，薩，長，芸の三藩は倒幕の挙兵盟約を結ぶ．これに対して同年 10 月 14 日（西暦 1867 年 11 月 9 日），徳川慶喜，大政を奉還する．同年 11 月 1 日，島津茂久，兵を率いて上京することを決める．このときにかぞえ 18 歳以上の志願者を募兵している．武器，その他自前の参加である．それにもかかわらず志願者が多く，お金を出したものが参加できるという人気である．

103） 同上，pp. 213–214.
104） 南日本新聞社編（1967）上，p. 152–153.

山本権兵衛はかぞえ 16 歳で年を 18 歳とごまかして参加する[105]．門閥を考慮しない募兵ということが人気のもとである．立身出世主義のエネルギーである．

慶応 3（1867）年 11 月 13 日島津茂久は鹿児島を出て，同月 23 日に入京する．このときに引率した兵は，城下七番隊から城下十二番隊までの 6 小隊，二番大砲隊を主力とする，約 2000 人である．高島が所属するのは遊撃三番隊である．遊撃一番隊は慶応 2 年 10 月，遊撃二番隊は慶応 2（1866）年 3 月に出動しているに対し，遊撃三番隊は慶応 3 年 11 月に藩地を出発しているので，高島は，藩主茂久とともに上京したものとおもわれる[106]．しかし，『国乃礎』[107]には，慶応 3 年春，上京とある．これが正しければ，慶応 3 年 3 月に久光が，藩兵城下一番隊から城下六番隊，一番大砲隊を率いて上京しているので，高島はこれに随従したことになる．どちらかのまちがいか，それとも高島が慶応 3 年 3 月に久光に随従して上京し，慶応 3 年の末になって，遊撃三番隊に編入されたかのどちらかであろう．

小隊の編制は，120 人から，130 人くらいであり，このうち戦兵（士分）は 80 人くらいである．これに，小隊長，監軍，半隊長，分隊長等の幹部たちと輜重兵その他を加えて 120 から 130 人となる[108]．遊撃隊は，一番隊，二番隊，三番隊があり，このときには遊撃一番隊は海軍であり，遊撃 2 番隊，遊撃三番隊が陸軍である．しかしながら遊撃隊はもともと海軍の所属であったとのことである．海軍の陸戦部隊ということであろう[109]．

万延元（1860）年 3 月 3 日，桜田門外の変が起こる．同年 5 月に，薩摩藩は軍制を改革している．常備兵として小銃隊は藩外出兵の場合は，20 歳以上 45 歳以下のものであり，藩内守備の場合は，この年齢は問わな

105） 同上，p. 296.
106） 鹿児島県編（1967）3 巻，pp. 458–459.
107） 杉本編（1895）p. 225.
108） 高島編（1937）pp. 93–94.
109） 大山（1988）上，p. 57．鹿児島県編（1967）pp. 493.

い．その編制はつぎのようになっている．伍長は戦兵 5 人に 1 人，什長は戦兵 10 人に 1 人，小頭は戦兵 20 人に 1 人であり，これを半手（20 人）という．半手ふたつを一手とする．一手は戦兵 40 人と幹部とで 48 人となる．二手 96 人を一組とし，その隊長を物主という．物主のしたに，談合役がいる．これをみると，監軍というのは，談合役に相当するようである．戦兵以外に，貝役，太鼓役等がいるので，一組合計約 120 人（これが後年の一小隊）となる．そのときの遊兵の位置づけは，銃隊と抜刀隊をかねるものであり，もっぱら，弓，槍，長刀等をもってたたかう部隊で，別名「殺手隊」ともいう．銃隊と殺手の両用の任務に就いて，小銃隊に編入されている[110]．

だとすれば，高島が槍と，長刀を得意としたという橋口の記述と一致する．高島は，槍術を修め，薙刀は田代流の名人であったと述べている[111]．高島の剣術についてはわからない．ただ竹刀をとって修練をしたことは確かであり，短いものより，刀は長いほうが好みであったと語っている[112]．高島はこの遊撃三番隊の監軍として出撃している[113]．監軍というのは大山によれば[114]，隊の事務官であり，旧陸軍の特務曹長，曹長の仕事であるが，その地位は高く，将校で通常 2 人である．したがって，戦状報告を書いて提出するのも監軍の役目である[115]．監軍は，半隊長格とおもわれる．大山の説明にあるように，監軍は隊に通常 2 人であるということ，戦死者の章典禄の額が，半隊長と監軍がおなじである[116]ということによる．

110） 高島編（1937）pp. 93–94．公爵島津家編纂所（1968）pp. 166–171.
111） 橋口（1932 A）p. 40．鹿児島県維新史料編さん所編（1979）p. 373 に長刀の師範家として，明治 2 年 9 月の藩庁の達書に，田代宗次郎の名がある．
112） 田中（1909）pp. 220–221.「藩の掟，習慣としても，竹刀を手に執らぬ訳にゆかぬ．そこで我輩も大に修練した」．南日本新聞社編（1969）上，p. 30 には，示現流の奥義をきわめたとある．
113） 『枢密院高等官履歴』3 巻 p. 163.
114） 大山（1988）p. 62.
115） 日本史籍協会編（1972），p. 1.

遊撃一番隊の隊長は，明治元（1868）年 8 月の時点では赤塚源六（海軍大佐，明治 6 年病気死亡）であり，2 代目「春日丸」艦長である．そしてこのときの一等士官が安保清康（のち海軍中将），大砲士官が伊東祐亨（のち元帥），小頭が井上良馨（のち元帥），兵士として西郷従道，東郷平八郎が従軍している．この隊の作戦地は，鳥羽・伏見から江戸，白河，若松である[117]．

遊撃二番隊長は大迫貞清であり，鳥羽・伏見で戦い，その後解散する．遊撃三番隊長が，西千嘉である．遊撃二番隊の解散後は，遊撃三番隊が遊撃二番隊となる．西千嘉の名前で紹介されるのは，この戊辰戦争のときだけである．このあと人名事典その他では，すべて西寛二郎で紹介されている．しかもそれらには西千嘉と西寛二郎が同一人物であるという案内はない．西寛二郎は，『明治過去帳』[118]では「戊辰の変遊撃一隊に長として伏見鳥羽淀東北に転戦」とあり，『日本現今人名辞典』には「遊撃一隊の長に選抜せらる時に年僅に 22 戊辰の役伏見，鳥羽，淀の間に転戦し更に東北の各地を転戦し」とある．西千嘉は記載されていない．『明治人名辞典』[119]に「戊辰の役藩兵第二遊撃隊長となり」とある．また『三方限名士略傳』[120]に「戊辰の役年 23 歳，藩兵第二遊撃隊長となり各地に転戦」とある．戊辰戦争で薩摩藩の遊撃二番隊長は，当初大迫貞清であり，鳥羽・伏見ののちは西千嘉である．西寛二郎，かぞえ 22 歳であれば，慶応 3（1867）年である．出撃した年は，22 歳である．遊撃三番隊が鹿児島を出るのが，慶応 3 年 11 月である．西寛二郎，かぞえ 23 歳であれば，明治元（1868）年である．鳥羽・伏見では遊撃三番隊として戦い，それ以降明治

116） 鹿児島県編（1967）3 巻，p. 508．小隊長 50 俵（30 年限），監軍・半隊長は 70 俵（30 年限）である．教頭は 150 俵（30 年限）である．
117） 南日本新聞社編（1967）上，pp. 293–294.
118） 大植（1971）.
119） 『明治人名辞典』上.
120） 『三方限名士略傳』p. 47.

元年に越後では遊撃三番隊が遊撃二番隊として戦うことになる．遊撃二番隊長となるのは，23 歳である．西千嘉と西寛二郎は同一人物とみてさしつかえない．

西寛二郎は，弘化 3（1846）年 3 月 10 日に生まれ，明治 45（1912）年 2 月 28 日になくなっている．11 歳で近侍になり，陸軍大佐になるのが明治 15（1882）年である．明治 37（1904）年に陸軍大将になり，明治 40（1907）年子爵になっている[121]．したがって，高島よりも 2 歳下の西が隊長を務めたことになる．このときまでは高島よりもうえであるが，大佐になるのが明治 15（1882）年で，高島よりもかなりおそい．

慶応 3（1867）年，高島はかぞえの 24 歳，遊撃三番隊の監軍である．遊撃三番隊のもうひとりの監軍は郷原左内である[122]．さきに述べたとおり監軍は半隊長格とおもわれる．

ところで，藩主島津茂久が入京した慶応 3（1867）年 11 月 23 日における薩摩藩の総兵力は，小銃隊 24 小隊，2 砲隊の約 3000 人である．内訳は，慶応 3 年 3 月，久光上京に随従した藩兵城下一番から六番隊，一番砲隊，同年 9 月，島津忠鑑引率の兵，番兵一番，二番，同年 10 月　島津久儔引率の兵，外城一番から四番隊，私領一番，二番隊で，すでに約 1000 人の薩摩兵が在京していた．これに藩主　島津茂久引率の兵，城下七番から城下十二番，二番大砲隊を主力とする約 2000 人を加えて，3000 人である．城下一番隊の隊長は鈴木武五郎（のち病死），城下二番隊差引は村田と逸見，城下三番隊の隊長は篠原国幹，四番隊の隊長は川村純義，五番隊隊長が野津鎮雄，二番大砲隊差引が大山巌，川路利良は兵具方一番隊の隊長である．薩摩兵の本陣は東寺であり，統括者は西郷隆盛，参謀は伊地知正治である．11 月末において，長州藩家老毛利内匠ひきいる長州兵は 1200 人，浅野茂勲ひきいる芸州兵は 300 人である[123]．

121）『日本現今人名辞典』3 版．
122）日本史籍協会（1972），p. 327.

慶応 3（1867）年 12 月 8 日の朝議で長州藩の朝敵が解かれ，同年 12 月 9 日朝 9 時（西暦 1868 年 1 月 3 日）桑名，会津の藩兵を宮門から追い払い，薩摩，安芸，越前，尾張，土佐が 9 門を固める．堺町御門が越前藩，蛤御門が備前，十津川郷士，乾御門が薩摩，石薬師御門が彦根，寺町御門が肥後，下立売御門が藤堂，中立売御門が因州，今出川御門が有馬玄蕃頭，清和院御門が備前という配置である[124]．

そして王政復古の大号令がだされ，将軍徳川慶喜の辞官納地を決め，従来の官職，摂政，関白，征夷大将軍，京都守護職等すべてを廃止する．新しい官職は，総裁に有栖川宮熾仁親王，議定に 5 公卿，すなわち仁和寺宮（小松宮）嘉彰親王，山階宮晃親王，中山忠能，正親町三条実愛（さねなる），中御門経之，そして 5 藩主，徳川慶勝，松平春嶽（慶永），浅野茂勲，山内容堂（豊信），島津茂久，参与に 5卿，大原重徳，万里小路博房（までのこうじ），長谷信篤（ながたに），岩倉具視，橋本実梁（さねやな），そして各藩 3 人，鹿児島藩は，岩下方平，西郷隆盛，大久保利通，尾張藩は，荒川甚作，丹羽淳太郎，田中国之輔，広島藩は辻将曹（まさとも），桜井与四郎，久保田平司，越前藩は中根雪江，酒井十之丞，毛受鹿（めんじゅ）之助，土佐藩は後藤象二郎，神山（こうやま）左多衛，福岡籐次という構成である[125]．

明治元（1868）年 1 月 3 日，午後 5 時頃，鳥羽赤池で薩摩の城下五番隊（隊長野津鎮雄），城下六番隊（隊長市来勘兵衛）等と幕軍との間で戦端が開かれ，戊辰戦争が始まる．城下六番隊長市来勘兵衛は戦死し，野津道貫が隊長となる．このとし高島はかぞえ 25 歳で，遊撃三番隊の監軍として，伏見，鳥羽，淀（1 月 3 日から 5 日）に転戦している[126]．

鳥羽・伏見開戦とともに 1 月 3 日，幕府は大阪の薩摩屋敷を攻撃する．それを察知した留守居役木場傳内，税所篤そして樺山資雄の 3 人はその前

123） 鹿児島県編（1967）3 巻，p. 460, pp. 492–495.
124） 東京大学史料編纂所編（1974）p. 241.
125） 同上，pp. 237–240.
126） 『枢密院高等官履歴』3 巻，p. 163.

夜に大阪屋敷を抜け出すとともに屋敷に火を放ち，一人 1 万両ずつを携行して，奈良経由で京都の西郷隆盛のところまで，3 万両を運んでいる[127]．これが薩摩の戊辰戦争での軍資金の一部となる．

大山は，1 人で担いで運べる量を計算している[128]．それによると 1 人が携帯できる量は，700 両から 800 両くらいとのことである．では重さはどのくらいあるのかみてみる．小判の重さは，小判のつくられた時期によって異なる．万延小判 1 両の重さは 3.9 g である．千両なら 4 kg, 1 万両なら 40 kg である．安政小判なら，それぞれ 8.97 g, 9 kg, 90 kg であり，万延小判の 2 倍以上の重さである．天保小判 1 両の重さは 11.2 g, 3 倍近い重さになる．これが享保小判になると 1 両の重さは 17.78 g で，重さは万延小判の 4 倍をこえている[129]．大山が計算の基準にした小判と樺山資雄等が運んだとされる小判の種類は異なるとおもわれる．おそらく樺山等は万延小判を運んだとおもわれる[130]．これなら 1 万両の重さは 40 kg である．3 万両すべてをなくすことを避け，危険分散のため 1 人 1 万両を運ぶことにしたとおもわれる．戦乱のさなかではなく，芸州藩屋敷にかくまってもらったりして，戦乱が収まるまでまって，比較的安全とおもわれる大阪から奈良を経て京都まで運んだようである．

それにしても 1 人 1 万両を京都までどのようにして運んだのであろうか．馬でか，荷車でか，それとも担いだのか．担いだのは本人か，従者か．1 人といっても当時のことだから，樺山等には従者がいたとおもわれ

127） 大山（1988）上，pp. 23–24．鹿児島県編（1967）3 巻，pp. 499–500 では，木場傳内，伊地知貞馨等となっている．

128） 大山（1988）上，pp. 23–24.

129） 板倉（1982）p. 52.

130） 薩摩藩の大阪蔵屋敷の 3 万両は，そのときに流通していた万延小判なのか，安政小判なのか，それよりも古い時代の小判なのか言及されていない．古い時代の小判なら，万延小判，安政小判に交換すると何倍かの価値になる．そのことには触れていないので，万延小判と推測される．もちろん，小判以外の可能性もある．

る．

明治元（慶応4）年1月3日，伏見の兵力として，薩摩の城下一番隊から四番隊，外城四番隊，一番砲隊の半隊，臼砲隊等と長州の2中隊，土佐の2小隊が配置されている．これに対して鳥羽には，城下五番隊，城下六番隊，一番砲隊の半隊，外城一番隊から外城三番隊，私領二番隊等が配置されている[131]．明治元（1868）年1月3日夜，遊撃三番隊は京都から伏見に到着する．伏見では兵力があまったため，兵力のたらない鳥羽方面にあまった兵力をあてることにする．これにより遊撃三番隊は高瀬川付近の戦闘が有利に展開した，同年1月4日午前11時頃，鳥羽に向うことになる．伏見から来た遊撃三番隊は，他の3小隊と長州の整武隊とともに，午後4時頃に富ノ森の幕府軍の陣地を攻撃している[132]．

明治元年1月4日朝，軍事総裁仁和寺宮嘉彰（よしあきら）親王は征討大将軍に任命され，錦旗と節刀を下賜される．薩長芸の藩兵を率いて，東寺を基地とする．錦旗がでるということは，これに逆らうものは朝敵，賊軍となることを意味する．錦旗奉行は四条隆謌，五條為榮，下参謀は矢守平好（仁和寺宮諸太夫），中沼之舜（学習院儒官），高崎正風である[133]．

明治元年1月5日，遊撃三番隊は伏見方面攻撃隊に編入され，同日午前7時頃から行動している．夜には淀を制覇し，5日午後10時頃，京都に帰陣している[134]．この報告書は，遊撃三番隊小隊長西千嘉，監軍高島鞆之助，郷原左内の連名で，同年2月6日に藩庁に提出している．官軍は，同年1月6日，鳥羽方面軍，伏見方面軍合同で，3方面から橋本，八幡を攻め，これを占領する[135]．

明治元年1月5日夕，徳川慶喜は大阪城でみずから戦うことを表明する

131） 鹿児島県編（1967）3巻，p. 472.
132） 大山（1988）上，pp. 79–85.
133） 東京大学史料編纂所編（1974）p. 441.
134） 日本史籍協会編（1972）pp. 326–327.
135） 大山（1988）上，pp. 96–99.

にもかかわらず，6 日午後 10 時には，大阪城をひそかに脱出し，1 月 7 日未明，幕府軍艦開陽丸（艦長榎本武揚は上陸していて不在のため，副長沢太郎左衛門を艦長代理にする）で江戸に逃げ帰る．同行者は，松平容保，松平定敬，酒井忠惇，板倉勝静，戸川安愛（大目付），榎本道章（目付），山口直毅（外国総奉行）等である[136]．

これにより慶喜征討令がでる．明治元年 1 月 16 日　島津茂久，将軍家茂の偏諱をすて，忠義と改名する[137]．同年 1 月 28 日，仁和寺宮嘉彰親王，海陸軍務総督兼征討大将軍を京都に呼び，「東征大軍議」を開く．同年 2 月 6 日，東海道先鋒総督兼鎮撫使，東山道先鋒総督兼鎮撫使，北陸道先鋒総督兼鎮撫使と呼称を改め，同年 2 月 9 日，熾仁親王を東征大総督とする．大総督府参謀，上参謀は正親町公董（きんただ），西四辻公業（きんなり），下参謀は広沢真臣がなり，総督府がすべての権限を握る．広沢真臣の辞退により，同年 2 月 14 日，西郷隆盛，林通顕（玖十郎）が大総督府下参謀となる．

鳥羽・伏見後，遊撃二番隊が解散したため，遊撃三番隊が遊撃二番隊となる．作戦地は越後，米沢，庄内である[138]．北陸道鎮撫総督（のち北陸道先鋒総督兼鎮撫使）は高倉永祜，副総督に四条隆平，参謀は黒田清隆，品川弥二郎である[139]．明治元年 1 月 20 日京都をたち，小浜，敦賀をへて，同年 3 月 2 日金沢，3 月 15 日越後高田に到着し，同年 4 月 4 日江戸に到着する．同年 4 月 11 日，江戸城開城となる．ところが，遊撃三番隊あらため遊撃二番隊が京都を出発するのは，明治元年 4 月 26 日である．北陸道先鋒総督と行動をともにしていない．同年 1 月 5 日から 4 月 26 日まで，京都に滞在している．そして閏 4 月 19 日に，高田に着陣している[140]．

明治元年 5 月 3 日，奥羽列藩同盟（仙台藩を盟主とする 25 藩）につづい

136）　東京大学史料編纂所編（1974）第 1 冊，p. 473.
137）　鹿児島県編（1967）p. 475.
138）　同上，p. 493.
139）　同上，p. 497.
140）　日本史籍協会編（1972）pp. 314.

て，長岡藩等加入が加入することで奥羽越列藩同盟（31 藩）が成立する．同年 5 月 19 日，会津征伐大総督を設置し，東征大総督有栖川宮熾仁親王の兼任となる．東海・東山・北陸三道の鎮撫総督府は廃され，あらためて白河口，平潟口，越後口の三道の総督が任命される．主力のおかれた奥羽征討越後口征討総督には高倉永祜，参謀には黒田清隆，山縣有朋があてられる[141]．

高島はつぎのように履歴書に書いている[142]．

「慶応 4（明治元）年 4 月初旬より越後長岡，與板，片桐，筒地村等に転戦進撃の際長岡において咽喉左下部に銃丸貫通傷を被り暫時入病院中なりしか当時我兵危殆なるに由り瘡痍をうらみつゝ出戦」

とある．

履歴にある「4 月初旬」は，遊撃二番隊が北陸道援軍として出撃を命じられたときの日にちであるとおもわれるが，遊撃二番隊が北陸道援軍として出動を命じられるのは，4 月 25 日である．そして高田に着陣するのが，閏 4 月 19 日である．日にちが履歴と多少異なっているのは，高島の記憶違いによるものか．高田に着陣した薩摩兵は城下十番，遊撃二番隊，外城三番，外城四番，二番砲隊半隊の 740 人である．しかも高田に集まった兵は，山道軍と海道軍とに分けられ，城下十番隊と遊撃二番隊は残される．大山によると，山道軍，海道軍がいつ進撃を開始したのか記録がない，また残された城下十番隊と遊撃二番隊がどの方面に投入されたかの記録もない，とのことである．高田に着陣した閏 4 月 19 日からの記録についで，遊撃二番隊は 5 月 4 日小千谷に出撃するとの記録があるだけとのことである．大山の推測によれば，高田・小千谷間は山地約 50 キロで，3

141） 同上，p. 485.
142）『枢密院高等官履歴』3 巻，p. 163.

日行程と考えられ，遊撃二番隊は少なくとも 5 月 1 日には高田を出発している[143]．

閏 4 月 26 日の小出島，小千谷，閏 4 月 27 日の鯨波，柏崎での戦闘に，遊撃二番隊は参加していないことになる．閏 4 月 27 日に小千谷を占領し，翌 28 日に柏崎を占領している．5 月 4 日小千谷に到着した遊撃二番隊は，5 月 10 日の夜中，榎木峠の官軍増援のため，11 日の午前 2 時ころから小千谷の官軍本陣から信濃川を渡河して，11 日払暁前には渡河を完了し，榎木峠正面は尾張 4 小隊と上田 1 小隊が展開しており，遊撃二番隊が展開する余地がすでにないために，隊を二分して，半隊は峠の右側の山手を進み，半隊は本道を進んで払暁に作戦地榎木峠に到着している[144]．

梅雨の頃で，信濃川は増水し，1 隻の舟に，8 人の水夫を使って，7, 8 人の兵士を載せたとある[145]．遊撃二番隊は榎木峠に到着後，隊を二分して山上の敵と戦うが，5 月 11 日正午前後に官軍は榎木峠を撤退し，夜にはさらに南に七滝まで下がり，小さな川朝日川を隔てて敵と相対することになる．このとき小千谷の官軍本陣の山縣有朋は朝日山攻撃を指示する．5 月 13 日，朝日山山頂の敵を攻撃するために，時山直八指揮のもと遊撃二番隊は他の隊とともに前進する．敵の将は桑名の雷神隊を指揮する立見尚文[146]である．ほかに長岡，会津の兵がいる．このとき官軍は指揮官時山直八の戦死とともに退却し，追撃されている[147]．

橋口によれば，西徳二郎[148]，滋野清彦等が夜，敵に切り込み，敵に追われて「越後川」の川淵に一晩隠れて帰隊したときに，高島は撃たれている[149]．「越後川」は信濃川のことであろうが，1 隻の舟に兵 8 人を乗せる

143） 鹿児島県編（1967）p. 485，大山（1988）p. 582–595.
144） 大山（1988）p. 616–617.
145） 日本史籍協会編（1979）p. 314.
146） のち第四師団長である．
147） 大山（1988）pp. 618–622.
148） のち外務大臣を務める．

のに，水夫 8 人が必要であることを考えると，信濃川本流であるのかどうか不明である．また滋野清彦は 5 月 12 日夕方，三仏生にいて，山縣有朋から 12 日の夜には小千谷にくるように命令されている．ところが伝令のまちがいで，翌 13 日夜明けに到着する．その結果，山縣の出動は遅れ，出動時にはすでに指揮官時山直八は戦死しており，味方は敵の追撃を受け退却中であったと山縣は書いている[150]．大山が『戊辰役戦史』で述べているように，越後口の戦闘について記録が乏しく，わからないことが多い．高島はいつどこで負傷したのであろうか．高島の書いた履歴書，『薩藩出軍戦状』，『国乃礎』に記録がある．『薩藩出軍戦状』によれば[151]，高島が撃たれたのは，遊撃二番隊が小千谷を出撃した 5 月 10 日午後 3 時以降，榎木峠での戦闘がおこなわれる 5 月 11 日夜までのことだとおもわれる．『国乃礎』には，「長岡斥候の際」とある[152]．だとすれば，5 月 11 日の夜，朝日川で敵と対峙したとき，敵情を探るため斥候に出て，七滝あたりで撃たれた確率が高いがどうであろうか．いずれにしても 5 月の前半に負傷している．明治元年は閏年にあたり閏 4 月があり，旧暦の 5 月 11 日は，西暦の 6 月 30 日にあたるので，西暦では，6 月後半から 7 月初旬の期間，梅雨時に負傷したとおもわれる．藩庁への報告書には，いつ誰が出したのかの記載がない[153]．それによると，遊撃二番隊の出兵方面は，高田，小千谷，長岡，新発田，水原，村松，米沢，庄内となっている．その期間は，明治元年 4 月 26 日から同年 11 月 28 日までである．

149） 橋口（1932 B）p. 42.『先賢偉人伝』pp. 45–46，では，高島と西千嘉が敵陣に切り込んで，逆襲にあい，越後川で一晩隠れ，翌朝ずぶ濡れで戻ったところを撃たれたとある．「将軍は自分で指を傷口に突っこんで，タマ（弾）を出し」とあるが，貫通していて弾は残っていないとおもわれるがどうだろう．事実はどうであれ，おそらく高島ならありえるだろう，高島はこういう人であったということであろう．

150） 日本史籍協会編（1979）pp. 317–320.

151） 日本史籍協会編（1972）pp. 314–315.

152） 杉本編（1895）p. 226.

153） 同上，p. 8.

同年5月19日，官軍は長岡を占領するが，与板，筒葉，大黒で苦戦する[154]．5月28日，遊撃二番隊の半隊が与板で，5月29日，遊撃二番隊の半隊が片桐村で戦闘している[155]．高島の履歴に「与板，片桐」で戦うとあるので，高島はこのどちらかの半隊に所属していることになる．6月2日には，遊撃二番隊は片桐を守備しており，敵の攻撃を受け，同月3日，4日には同地を撤退している[156]．

同年6月1日に高島は家督を相続している[157]．同年6月14日，仁和寺宮嘉彰親王を会津征討越後口総督とするとともに，近辺34余藩に北陸出動を命じ，越後口の官軍の兵力がこれによりいちじるしく増強する．6月末，吉井友實，前原一誠が山県有朋，黒田清隆に加えて，長岡本営で参謀を務める[158]．

同年7月1日，官軍は栃尾を攻撃するため，軍を左翼・中央・右翼の3方面に分ける．遊撃二番隊の半隊は中央軍，森立峠口に編入されている[159]．同盟軍を分断するために，7月21日，遊撃二番隊は諸隊とともに海上機動部隊（約1000人）を編成し，指揮官黒田清隆，参謀山田顕義，本田親雄，軍監岩村高俊というスタッフのもと柏崎に集結し，同月23日乗船して，同月25日午前7時頃から太夫濱，松ヶ崎付近に上陸する．遊撃二番隊は新発田に向い，水原，保田を占領する[160]．7月24日，河井継之助は長岡を奪回するが，一時的なことにおわり，同年8月5日，越後は平定される．

154） 鹿児島県編（1967）p. 485.
155） 大山（1988）pp. 671–672, p. 677.
156） 同，pp. 696–697.
157） 『日本現今人名辞典』．また『先賢伝記集』第1巻，年譜 p. 108には「兄研二郎，病死，家督をつぐ」とある．橋口（1932 A）p. 40，次兄は彦次郎である．
158） 鹿児島県編（1967）pp. 485–486.
159） 大山（1988）p. 744．残り半隊の位置はわからない．
160） 同 pp. 850–868.

その後越後口の兵は，会津・米沢・庄内・秋田の 4 方面に分けられ，遊撃二番隊は米沢に向うことになる．8 月 6 日，新潟援兵として，西郷隆盛と 3 小隊（兵具方附士一番，兵具方足軽二番・三番の 3 小隊）を春日丸（艦長赤塚源六）に乗せて鹿児島を出航し，同月 11 日，新潟に着く[161]．8 月 15 日，新潟で西郷と山縣有朋会談する[162]．8 月 28 日，米沢藩が降伏したことにより，兵を会津と庄内に向かうもの 2 方面に分ける．遊撃二番隊は庄内に向かう．8 月末に仙台藩，9 月 16 日に会津藩が降伏，9 月 23 日には庄内藩（藩主　酒井忠篤）が降伏する．同年 9 月 26 日，西郷隆盛，参謀黒田清隆は庄内鶴岡城を納める[163]．このとき高島も西郷，黒田に同道して庄内城明け渡しに立ち会っている[164]．

このときのエピソードを長谷川伸が書いている[165]．庄内藩が戦争で政府軍に負けてその軍門に下ったとき，処遇に情け深いものがあり，藩主・藩士はこれに深く感謝したとのことである．酒井忠篤主従が城を明け渡し禅龍寺に退くとき，政府軍が敗軍に辱めを与えないようにと注意を与えるだけでなく，敗軍を見ることすら禁じている．また，藩主酒井忠篤も捕縛されることなく，軍門に下るという名目に近いことだけですまされている．藩士に対しても，兵器・弾薬をとりあげただけで，自宅謹慎ですましている．このあたりのことはいいとして，私領五番隊が庄内城を受け取るのに，西郷は私領五番隊に高下駄を履かせたとある．あるいは西郷自身，本名を名乗らないで偽名を使って黒田参謀に同道したともある．このようなことをした理由がわからない．

庄内に行くまでに天童がある．天童藩は外様，2 万石の小藩である．藩主は織田信敏である．この藩は，明和 4（1767）年の山縣大弐の明和事件

161） 鹿児島県編（1967）pp. 486–489.
162） 日本史籍協会（1979）pp. 447–448，大山（1988）p. 881.
163） 鹿児島県編（1967）pp. 487–489.
164） 橋口（1932 C）p. 67.
165） 長谷川（1955）p. 318–319.

にかかわって，藩主織田信邦は蟄居となり，上野の国小幡から出羽の国高畠に移封された経緯がある[166]．その後，天保元（1830）年に，陣屋を高畠から天童に変えている．100 年も前に勤皇倒幕の先行者であった天童藩に対しては庄内藩のようなことはひとつもない．西郷隆盛が庄内藩にこだわりがあったようにおもわれるが，なぜ西郷隆盛が庄内藩にこれだけのこだわりをもったのか．不思議である．

さきにみたように，高島は，こののち明治元（1868）年 10 月，凱旋と履歴に書いている．これは黒田清隆参謀の帰国命令をうけて，同年 9 月 29 日に庄内城下を出ているので，この日付を高島は書いているとおもわれる．京都に着くのが同年 11 月 2 日，鹿児島帰藩は 11 月 28 日である[167]．

明治 2（1869）年 1 月 3 日，高島は教佐に命ぜられる．同年 7 月 5 日には，軍功により賞典禄 8 石を藩から下賜されている．

吉井友實は越後口参謀で，永世禄 1000 石を与えられている．西郷隆盛 2000 石，大村益次郎 1200 石，伊地知正治 1000 石，そして山縣有朋 600 石である．高島は 8 石である．吉井友實は高島よりもはるか上の地位にいたということである．薩摩藩士の 8 石は，藩主島津忠義が藩士に与えた恩賞である．つまり，吉井，西郷等は政府の官職にあるものに対しては，明治天皇が恩賞を下賜されたが，高島は当時，薩摩藩士であるので，藩主からの恩賞である．基準は，兵具方の場合は，一等禄 6 石，二等禄 5 石，三等禄 4 石で，一般城下士は一等軍功禄 8 石が支給されている．大山巌，村田新八，篠原国幹，辺見十郎太，野津道貫等の小隊長クラスもすべて 8 石である[168]．

166） 市井（2004）p. 44.

167） 日本史籍協会（1972）p. 324.

168） 鹿児島県編（1967）3 巻，pp. 509–510．大山（1988）下，p. 670．大山は，藩主忠義が下賜された 10 万石の章典禄を藩士にすべて分け与えたと述べているが，鹿児島県編（1967）3 巻，p. 504 では，再三の章典禄辞退が受け入れられないため，5 万石は久光の分家費用に使用し，残り 5 万石は，↗

死傷者にも，明治政府から下賜されている．西郷従道は 300 両，高崎正風は 100 両を戦傷に対して与えられている[169]．しかし，このなかに高島の名はない．戦傷にも軍功に値するものとそうでないものとがあるようである．

明治 3（1870）年 2 月初旬，高島は教佐として，御親兵一，二，三番大隊を督して上京する．

明治 3（1870）年に上京するのは，一番大隊，四番大隊，三番砲隊，四番砲隊である．城下二番大隊と城下三番大隊は，明治 2（1869）年 9 月に上京し，これらの隊は明治 3 年 3 月に一番，四番大隊と交代で帰国を命じられている[170]．帰藩するのは，種子田政明，篠原国幹の大隊であり，東京に行くのは野津鎮雄の大隊と，大山巌の砲隊が含まれている．そしてかれらが実際に動くのは，3 月である．野津，大山の大隊，砲隊は同年 3 月 27 日に外国船で東京に到着している．種子田の三番大隊は同年 3 月 28 日に外国船で東京を出て，同年 4 月 2 日に帰藩している．このときに村田新八も帰藩する．高島が書いていることと日時，大隊名が多少異なる．日時は，2 月初旬に命令をうけたのを書いたものとおもわれる．大隊名は，高島の記憶には，藩の精鋭中の精鋭，一番，二番，三番大隊だったのかもしれない．

鹿児島藩の常備隊の編成[171]は，明治元（1868）年 9 月において，90 人を 1 小隊とし，6 小隊が 1 大隊となっている．大隊は城下 3 大隊，諸郷 12 大隊で構成されている．さきにみたように 90 人は，士分の兵士の数である．1 小隊の総員は，輜重兵その他を入れて 120 人として計算すると，1

↘　明治 6 年から 5 カ年間，県内学校資金として鹿児島県に寄付したとしている．

169）霞会館諸家史料調査委員会編（1985）pp. 44–46.

170）鹿児島県編（1967）3 巻，p. 576．鹿児島県維新史料編さん所編（1979）pp. 544–546.

171）同上，pp. 564–566.

大隊 720 人，3 大隊であれば 2,160 人となる．その後，この編制が改められている．士分の兵士 40 人，押伍 8 人で 1 小隊となる．8 小隊が 1 大隊となる．明治 3（1870）年正月で，常備隊 131 小隊と 3 分隊，人員 12,067 人である．同年春には，常備隊 17 大隊と 7 小隊半，兵器方附士足軽常備 1 大隊，予備 20 大隊と 7 小隊 3 分隊となっている．1 小隊約 50 人として，1 大隊は 400 人である．3 大隊であれば，1,200 人となる．高島は，およそ 1,200 人の兵隊を指揮して，上京したことになる．

高島，満 25 歳の旅立ちである．

参考文献

天野利武編（1968）『八十年志』学校法人追手門学院.
板倉聖宣（1982）『おかねと社会』仮説社.
市井三郎（2004）『思想からみた明治維新』講談社.
稲村徹元編（1972）『大正過去帳』東京美術.
岩崎徂堂（1903）『明治大臣の夫人』大学館.
岩崎徂堂（1904, 1934 増訂）『壮談快挙　歴代閣僚傳』玲文社.
内川芳美・松島栄一監修（1986）『明治ニュース事典』第 8 巻，株式会社毎日コミュニケーションズ.
遠藤汪吉編（1978）『九十年志』学校法人追手門学院.
大植四郎（1971）『明治過去帳』新訂，東京図書.
大久保達正監修（1987）『松方正義関係文書』8 巻，大東文化大学東洋研究所.
大塚弥之助（1940）「故徳永重康博士」『科学』10 巻，4 号，岩波書店，pp. 30–32.
大月ひさ（1902）『英雄の片影』文学同士会.
大森昌衛（2007）「徳永重康－動物学科に籍を置き地質学を専攻した異彩の研究者－」『地球科学』61 巻，pp. 73–75.
大山柏（1988）『戊辰役戦史』上下，増訂版，時事通信社.
覚張栄三郎（1889）『絵本明治太平記』上田屋.
鹿児島県維新史料編さん所編（1973）『忠義公史料』1 巻（鹿児島県史料）鹿児島県.
鹿児島県維新史料編さん所編（1974）『忠義公史料』2 巻（鹿児島県史料）鹿児島県.

鹿児島県維新史料編さん所編（1979）『忠義公史料』6 巻（鹿児島県史料）鹿児島県.
鹿児島県史料刊行委員会編（2001）『薩藩学事一・鹿児島県師範学校史料』鹿児島県史料集 40 集，鹿児島県史料刊行会.
鹿児島県姓氏家系大辞典編纂委員会編（1994）『鹿児島県姓氏家系大辞典』角川日本姓氏歴史人物大辞典 46，角川書店.
鹿児島県編（1967）『鹿児島県史』1・2・3・4・5・別巻・年表，鹿児島県.
鹿児島県歴史資料センター黎明館編（1992）『玉里島津家史料』1（鹿児島県史料），鹿児島県.
霞会館諸家史料調査委員会編（1985）『華族制度資料集』昭和新修華族家系大成別巻，吉川弘文館.
霞会館華族家系大成編輯委員会編（1996）『平成新修旧華族家系大成』上下，吉川弘文館.
樺山愛輔（1988）『父樺山資紀』大空社.
樺山資英伝刊行会編（1942）『樺山資英伝』樺山資英伝刊行会.
川崎大十（2000）『「さつま」の姓氏』高城書房.
神田中学校友会（1901）『皇室之藩屏』博報堂.
芳即正（1983）「鹿児島学校と三州義塾・史料と政治的背景についての考察」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』13 号，pp. 65–111.
近世名将言行録刊行会編（1934）『近世名将言行録』1，吉川弘文館.
宮内庁編（1969）『明治天皇紀』第 2，第 3，第 7，吉川弘文館.
公爵島津家編纂所編（1968）『薩藩海軍史』上・中・下，原書房.
『国民新聞』明治 28 年 4 月 11 日.
黒龍会編（1966）『東亜先覚志士記伝』下，原書房.
薩藩史料調査会（1918）『鹿児島県政党史』薩藩史料調査会.
『三方限名士略傳』三方限名士顕彰会，1935.
参謀本部陸軍部編纂課編（1887）『征西戦記稿』陸軍文庫.
『時事新報』明治 41 年 3 月 5 日.
『職員録』印刷局，明治 21 年，明治 25 年，明治 28 年，明治 29 年.
白洲正子（1999）『白洲正子自伝』新潮社.
『樞密院高等官履歴』第 3 巻，大正の一，東京大学出版会，1996.
杉本勝二郎編（1895）『華族列伝国乃礎』下，華族列伝国乃礎編輯所.
『先賢偉人伝』追手門学院小学校，1988.
高島弥之助編（1937）『島津久光公』高島弥之助.

田中萬逸編（1909）『死生の境』博文館.
『帝国大学出身人名事典』第 2 巻，日本図書センター，2003 年.
東亜同文会編（1973）『続対支回顧録』上下，原書房.
東京大学史料編纂所編（1974）『復古記』第 1 冊，東京大学出版会.
東西文明社編（1958）『公卿・将軍・大名』東西文明社.
徳永重元（1999）「地質学者徳永重康小伝」地質学史懇話会会報，13 号，pp. 7–10.
『徳永先生記念論文集』昭和 14（1939）年 5 月.
中嶋繁雄（1992）『事件で見る明治 100 話』立風書房.
長田偶得（1901）『逸事奇談　明治六十大臣』大学館.
名古屋偕行社編（1909）『明治三十七八年戦役実話精神教育資料』名古屋偕行社精神資料発行部.
名村精一（1997）『追手門学院の源流』追手門学院小学校.
二松学舎百年史編集委員会編（1977）『二松学舎百年史』二松学舎.
『日本現今人名辞典』訂正 3 版，日本現今人名辞典発行所，1903.
日本史籍協会編（1972）『薩藩出軍戦状』1，日本史籍協会叢書，東京大学出版会.
日本史籍協会編（1973）『百官履歴』1,2，日本史籍協会叢書，東京大学出版会.
日本史籍協会編（1978）『陰陽暦対照表』続日本史籍協会叢書，東京大学出版会.
日本史籍協会編（1979）『山縣公遺稿・こしのやまかぜ』続日本史籍協会叢書，東京大学出版会.
日本史籍協会編（1980）『維新前後実歴史傳』2，続日本史籍協会叢書，東京大学出版会.
日本史籍協会編（1983 A）『大久保利通日記』1, 2，日本史籍協会叢書，東京大学出版会.
日本史籍協会編（1983 B）『大久保利通文書』1，日本史籍協会叢書，東京大学出版会.
日本史籍協会編（1983 C）『大久保利通文書』10，日本史籍協会叢書，東京大学出版会.
『日本人名大事典』復刻版，平凡社，1979.
橋口西彦（1932 A）「革丙将軍の横顔（一）」『三州』第 13 年 4 号，pp. 38–42.
橋口西彦（1932 B）「革丙将軍の横顔（二）」『三州』第 13 年 5 号，pp. 42–46.
橋口西彦（1932 C）「革丙将軍の横顔（三）」『三州』第 13 年 6 号，pp. 67–71.

長谷川伸（1955）『日本捕虜志』新小説社.
千河岸貫一編（1902）『明治百傑伝』青木嵩山堂.
日高南甫（1931）『波瀾重畳修養立志歴代大臣物語』カオリ社.
辺見勇彦（1931）『満州義軍奮闘史』先進社.
百年志編纂委員会編（1988）『百年志　追手門学院』学校法人追手門学院.
三宅雪嶺（1950）『同時代史』2, 3 巻，岩波書店.
南日本新聞社編（1967）『鹿児島百年』上中下，謙光社.
南日本新聞社編（1969）『郷土人系』上中下，春苑堂書店.
『明治人名辞典』上下，日本図書センター，1987.
八束周吉編（1958）『七十年志』追手門学院.
矢野恒太記念会編（2000）『数字でみる日本の 100 年』改訂 4 版，国勢社.
矢野恒太記念会編（2005）『日本国勢図会』2005/06 版，国勢社.
山川浩（1965）『京都守護職始末』1，遠山茂樹・金子光晴訳，平凡社.
脇水鉄五郎（1940）「理学博士・工学博士　徳永重康君を悼む」『地質学雑誌』vol. 47, p. 558.
渡辺斬鬼編（1909）『名流百話』文錦堂.

（付記）

引用文について，仮名遣いを新仮名遣いに改めた箇所，漢字を当用漢字に改めた箇所がある．また引用文にある振り仮名，傍点は省いている．

（2007 年 6 月 29 日受理）